

折みて漸々尋ねあてし参りましたがどうも関が高くて入りかねました次第何卒以前の金吾と思召さす更めてお近付願ひたう存じます」といふ聲を臺所よてお常が開付け不審さう差覗く顔を金吾が疾も認め「ア、お常イヤ今の御新造さまだ私しが斯して来たを變と思ふであらうが之より種々譯のあるとで緩くり話さねば分らぬから不審も晴れまいが必ず思ふ思ふてくださるな」といふを半分聞きはてすお常の顔を引込まして取合ぬを朝光の我へ遠慮と思へば金吾へ氣の毒もあり段々の語の様子よていさして悪意のあるとも思へぬ緩くり仔細を聞んものと座敷に延入れお常をも呼んで自分の側よ坐らせ扱て金吾どのお前が今日尋ねてござった仔細の知らぬが先づ私がお話し申とがあるお前が横濱を逃亡の後」と話しかるを金吾が押留め「其後の事の先日横濱で委しう或人から聞きました又貴所が共々倫齋様のお世話になされしから御夫婦なられた事まで向ふの水菓子屋の

婆さんから残らず承まひり愈々私しの罪の重いのを知り面目をございませんから折角尋ねあてたがお目よかしくらすと歸らうかとの存じましたのが只た一言聞きたいの娘の身の上と申したら棄てし逃たくせよ娘の事などしの思召もございませうが年を取て前非を後悔するも從ひ不實の様なれとお常や倫齋様の事の左のみ思ひ出しませんが娘お若の事ばかりの始終氣懸り十六七の娘を見る度我子も丁度此位の年齒と朝暮懐かしう思ふておりました所へ不思議なとで倫齋様が東京でお亡りなつたといふことを知りましたゆゑ扱にお常も娘と一所又居るとお夫から諸方を盲探し尋ねましたがお知れませぬから元から段々尋ねたら分るともあらうと横濱へ参り以前住居した邊で聞知して神奈川から倫齋様の方へ引移たといふとまでの分りませぬが娘の只他所へ養女遣たとか一時預けたとかいふ事のみよて何よも分ませぬゆゑ又東京で方々尋ねるうち今日計らすも先刻途中で

起 縁 は ろ い

湯屋へ入る所を見かけ後姿の慥かよお常と思ひ向ふの水菓子屋へ休んで段々様子を聞き越出様の御新造よなつてゐるとまで委しう分りましたから湯屋から歸るを待て鐵面皮よもお尋ね申した譯で實にお二人よ合す顔のございませんがお目よかゝつて承まのつたら娘の在所も分らうし又お許しおさるなら娘だけの私しが引取り養育して以前前の罪を滅したいと子を思ふ一心から耻を忍んで参りました斯いふ譯でござりますから何ぞお二人様是までの不義理の御免ください倫齋様よ此間中呉々もお詫を致しましたと懐中より倫齋の位牌を取出し二人の前よ差置き「此位牌を所持致しますを定めて御不審と思召さうし又仔細をお話し申した處が御信用もございますまいけれどお中ねべ分らぬゆゑお話し申します」と以前懇意よせる破落戸千住の千吉が上野公園地よて盗みしを賞ひ受けたる旨を物語り「是よて初めて倫齋様が東京よ居られしことを知りましたゆゑお常も娘も多分一所

起 縁 は ろ い

よ居ると尋ね廻つて今日計らずもお目よかゝるとよなつたも全く此お位牌のお引合せと存じます」と両眼よ涙を浮めて語りしもお常の更よ信用せず扱の前非後悔と口よの云へと零落して拘摸など働さおるものと薄氣味わるく思ふといふも實に金吾と未だ夫婦の縁の絶たざるよ父が言葉よ従ふて此朝光よ嫁せしなれば何か故障の起りもせんかと筋かよ心を痛めける朝光の金吾が段々の物語りよ其心底の改まりたるを察せしかば大よ安心してお常よ命に先刻探偵長を櫻したる残りの酒肴を持出させ金吾よ俯めて打解けたる色を示し「お話しのお趣きよて委細の分りました去れば拙者が倫齋翁の許しを得てお常を妻よ致せし事よ就て別よ異議のございますまいな」更まつてのお尋ね元來養ひかねて棄てた妻子お世話くださるを有がたいところ思へ何の異議がございませう以前の事を申されて此身を切られるやうよ思ひますゆゑ何卒以前の事の夢よして再びお話し御無用願ひま

二百
す御新造さん無種々お怨みもございませうが只今申す通りゆゑどう
ぞ何事も無い以前として私しを金吾で幸い新助といふ他の人と思召
して御交際を願ます」といふは朝光の小首を捻り「ふ、今での新助と申
さるゝか夫での若や根岸の行者の道場で書記役をして居られぬ
か「へい其新助でございます道理こそ先刻のお話しは千住の千吉と申
されしが渠も當今の道場へ雇はれて居る様子」左様千吉を御存じです
か實の渠から此位牌を貰ひうけた時の話しから私しが世話をして道
場へ雇はれる様になつたのでございませう」そうか夫ア面白い世間の噂
での行者の人の身の上の事を見透しやといふが感心なものじや「へい
内幕の事を知らぬ人、左様思ひますすが皆な山仕事で其前へ探偵を
使つて内々で其人の來歴などを委しく探らせて置いていふのですから
誰までも出来る事です」そうかも知らんがあの位は信仰を取るゝのま
だ外へ何か不思議な事をするのであらう」何だか不思議な事だらけで

内へ居ても譯の分らない事が澤山あります」書記役でもする其許も
分らぬ事のあるまゝ「い、エそうでございません内輪の事を知てるの
は四十七といふ講元だけです」ふ、そうして行者が其四十七といふ者
よばかり内輪の話しをするの、どういふ譯なものか」どの質問も新助
は西新井まで自分が四十七の空車を盗みし次第から四十七の脊へ龜
甲形の顯はれし譯までを語らんとし思ひしが未だ朝光の底意も分ら
ず且つ自分の曲事を吹聴するも當れば今の云はぬこそよけれど思ひ
「左様ですどうして四十七が行者の氣に入るやうな事がありましたか其邊
の事、少しも存じませぬ」一体四十七といふ者のどういふ素性の男か
「能く存じませぬが神戸の者で先年東京へ來て車屋をはぢめ挽子の
六七人も置いて居たのを浪花町の道具屋で豊吉といふ者へ最負ふされ
渡世をしながら豊吉の別荘の番人をして居たのが行者の氣に入られ
てから今での豊吉の方が下へ屬て働くやうになつたのでございませ



起 縁 は ろ い

「それで、豊吉の不平等であらう不平なの豊吉ばかりでございませ
 ん私しども初め面白くありませんが外に錢を取る所がないので附屬
 てゐるのです」其許などの何でも出来る腕があるから何所へ行つても十
 や廿の月給を取るの容易な事であらうよそんな所も居るといふ
 いふものじや」「一旦不心得を致しましたから以前の知己へ周旋を頼む
 譯もいかず據ころなく斯じてゐるのです」私が周旋をしやうじやア
 ないか「以前の事を咎めずよお世話なしてくださるなら私しの命がけ
 で勉強を致します」其許が眞實な左様いふ心底なら随分世話をしませ
 うが其前よ一ツの功を立て見せて貰いたう一ツの功とこの様な
 事を其許が道場も居るこそ幸ひ其許が懇意の千吉よ力を協せて行者
 の秘密を探つて貰いたう」それで千吉の既其探偵を御依頼なッ
 てゐるのですか「左様千吉と一所なら充分探偵が出来やうと思ひま
 す」委細の千吉から相談をするやうよ申して置うから一ト骨折てくだ

起 縁 は ろ い

さい「宜しうございます以前の罪を償ふ爲めよ充分盡力致しませうが
 先刻お話し申しかけた娘の只今何所も居りませうか一寸なりと逢ひた
 う思ひますからお聞かせくださいまし」と又もお若の事を云出る心の
 程のあわれさをそれと察するお常も同じ思ひよて先よ少しく疑ひ
 て快よからず思ひしも今の訪ひ來し心も分り殊も行者の探偵を身よ
 引受けて爲すといふ其頼もしき情誼も感じお常の初めて笑を合み新
 助の前さる杯酒を注ぎたして「段々のお話しで妾も安心致しました
 どうぞ此上のみ今のお話しの事よ付て一ツの功をお立てなされ早う
 は出世をなさるやうよ願ひますお若の事の養女も遣た先が神戸へ引
 越して其後の音信不通更に様子も分りませぬので妾も朝夕心配のみ
 しております」と思ひ出だして涙ぐむ親の心の皆一ツ新助も折角尋ね
 めてたる家も娘の居らぬと落膽せしが飽くまで尋ね逢んとて其先の
 名前さへ分つておれば暇を見て私しが一寸神戸へ参り尋ね出した上

取戻せるものなら談判をして是までの食雑用の出しても引取て来ま
すといふを朝光が傍らより賛成して若しも神戸へ行たなら序で四
十七の身元をも委しく調べて来て貰ひたい其代り相當の旅費を役所
から出すやうよしやうと尙は打解けて語らひける

◎かぬ種のはへぬ

奈良崎四十七の行者勸請の發起人たる豊吉を疎んじ行者の指圖として
道場の事を我一人よて支配し大金を散じて種々の方便を施し而して
世の信仰を得んと計畫せし事が其圖に當り寄附の金圓器物も意外に
多かりしかば尙も莊嚴を増さんとして自ら願人となり美麗なる大師堂
を建立するとなり廻々工事も捗取りて今日其上棟式を行ふとて
朝の程より老若男女群集して道場の内外の人の山を築きし如く押し
もかへせぬ賑ひよて豫定の時刻は番匠の皆な裝束を着飾りて棟の上
に設けたる祀の壇に幣をかけ供物を列べて一齊に祝言を捧ぐる鈴の

音も鉦を鳴して本堂に行者が多く信徒と共に供養を修する讀經の
聲も一時の耳さへ聳るばかり式の終りも棟上より供物の餅と錢を
撒き本堂よて結縁の御符を撒きて參詣の群衆も拾ひす雑沓の山も
崩るばかりよて怪我人さへもありしといふ漸く式の果てたる後來
會の講中一同よ赤飯と煮染の折詰を配り午後三時頃より祝宴を開
いて番匠を始め諸職人と講中の世話人へ酒肴を饗せしかば何れも喜
び打興々歌いつ舞ひつ賑やかよ退散せし日暮よて諸事滞ほりなく
濟みければ四十七豊吉の喜び大方ならず夫より別酒宴を設け此日
萬事を周旋して力を盡せる新助千吉其他内輪の人々を呼集め日なら
ず大師堂が落成して入佛供養の濟む上の皆夫々よ給料を増すべけれ
ば尙此上の盡力を頼むとて何程かの手當を與へ酒肴を備めて犒ひけ
れ何れも喜び酒を過して今日の賑ひを見るよつけ此道場の益々繁
昌致すべし行者の利益の尊としと媚び諂へば四十七の最と誇り顔よ

起 縁 は ろ い

上坐より直りて一坐を見渡し各々方より何と思すか知らねども假令行者が何程の智識なりとも此所へ勸請したるまゝして豊吉どのか爲られた様も打捨て置て世話をやかずば斯様も人の信仰を得て斯様も寄附も集るまじ是皆も拙者が工夫して危ない橋も渡って見て夫々種を播きたればこそ今日の繁昌を來たせしなり所謂阿彌陀も金で光る世の中行者の功力も拙者が資金を注入めばこそ現はれるやうなもの又爰もござる豊吉どのが華族様と親類もなられたのも元はといふと拙者が連れて來た行者も少しなりとも資金を注入された縁引から起つた事又拙者が賤しい車屋から只今の様も地面持となつて行者の講元を勤め大勢の人々尊敬されるやうになつたのも皆な拙者が智慧と才覺を揮ふて注入んだ金の光りで誰かの様も懐中手で旦那顔ばかりして居ての第一世間で行者の功力を知らぬゆるいつまで経ても此道場の繁昌する氣遣ひに決してないど初め豊吉の別荘の番人をしてゐた

起 縁 は ろ い

る縁故より豊吉が其地所と家作を道場も寄附するより方り行者の指圖で一時四十七の名前も替替へしを我物顔も人々吹聴するのみか己れが行者の心を得たるを鼻もかけ暗も豊吉を嘲ける手柄話を憎しと思へば豊吉の酒をも飲まず悴が病氣で臥しおるを辞し其場を避け早く歸宅をなしけるが新助と千吉の豫て朝光よりの内意もあれは斯ういふ時より方便を運らし内輪の秘密を探らんと云合さねと二人とも他の人々が歸るも構はず酔ふたふりもて暫く跡も留まりぬ



を吹て疵をもとめる

新助の四十七が行者も仕へる智恵才覺を譽めそやして聲を低め私しの喰詰めて二進も三進もいかない所をお前さんよ救はれ西新井の御用を勤めてから追々お取立も預かり今での羽織を着る人間らしい身分もなりましたからお前さんの事ならそんな事でもする丁見ですナア千吉そうじゃアないか「そうとも斯う御厄介なるから何所まで

起 縁 は ろ い

も骨を折る積りです以前に悪い事もしましたが追々年もとるし冥利
がよくないと気が付いて行者様御奉公して罪滅しをするのが一番
だと思ひますが未だ昨今で些ども様子が分りません一休行者様のお
年のお幾つです「お幾つだか御自分も慥か御存じがないといふが凡
そ七十ばかりだらう」成ほどお髪や髯の白い所七十位見えます
がお顔や其外の水々してゐる所五十前後としか見えませんが世間
でいふ様は木食ばかりしておいでなすつちやアあといふ色艶ない
さますまい毎晩お酒やお肴を上るのですか「と問はれて四十七の少
し考へしが「ナニ行者様が其様な物を上るものか」それでも大抵毎晩十
一時から十二時ごろ料理を持込ひじやアありませんか「あれア私が喰
ふのが日が暮れてから晝の勘定や何かを片付けて飯を喰ふから毎も
晩くなるのだ」そうですか私し又御養生の爲め行者様が上るのかと
思ひました能く木食で生きてゐられたもんだお稚兒も矢張そうです

起 縁 は ろ い

か「お稚兒の御修行中だから日一度づつ粥を上るが此節はるれも上
らない日がある」そうしてわのお部屋へ行く者の貴所ばかりで内の様
子の誰も知りませんが不斷のどうしてゐらつしやいます一度内々で
お部屋を拜見するとの出来すまいか「それア別隠す譯もありません
拜見するとも出来るが全休行者様の餘まり人逢たり見られたりす
るをお好みなさらぬから遠慮して人を入れない様にするのだ別異
つたとも何もないのサお部屋いらつしやる時も屹然と坐つて御
祈念をさすつておらつしやつて私も長らくお側居るが是まで一度
でもお樂なおいでなすつたのを見たことがない「へい開けバ聞くほど有
がたい事だ私しも噂々の死ぬし子の無し此世は樂みといふものが無
いから是まで多くの人を困らした罪滅しと寧そとの行者様のお弟子
よなつて一生を送りたいものだ木食でも何でもする了見ですがお前
さんから行者様へ願ひなすつていくださるまいかと千吉が他事な

き頼みを四十七の酔ふて一時の戯れと思ふて程よく挨拶して取合ふ
氣色あらざれば其夜のそのまゝ別れしが如何もなして行者の秘密
を探り出し一つの功を立んとて千々も心を摧きしも用心深き四十七
が少しも眞を明かさねば捉へて質す緒さへも見出だし得ざる口惜し
さよ此身を捨てしも探らんと千吉の新助と相談のうえ行者の弟子と
なり奉公せんと只管ま請ふを初めの四十七も彼是れいふて拒みしが後
よハ新助も口を添へ其心願を遂げさせてと切りよ迫るを怪しと氣の
付く四十七が扱ハ千吉以前の通り警察署の命を受け下探偵入込み
しが秘密の分らぬ其爲めは徒弟とあつて行者は近寄り事を仕遂げん
工みよな油断あらじと事ま托して否やの返事を延し置き夫より二人
の舉動も眼を注ぎ様子を窺ひをると知らねハ二人の何の氣も付かず
互ひも折々耳語さあひ手帳も何か記すなど常も異りし事あるより確
かよそれと察せしかど今一時は二人の雇を解くとあらハ我も秘密の

ある故と却て渠等の疑ひを増し益々探偵の念を強める種となるべけ
けハ知て知らざる体ももてなし渠等を程よく遠ざけて内輪の事を聞
かせぬ様用心するの外なしと思へハ内々豊吉も其旨を告げ二人は
心を許すなど堅く警しめ其後の新助の受付掛を云付けて帳簿一切の
事を豊吉に任じ千吉ハ其志願の旨を行行者様ま申せし處仔細あつて徒
弟の教育ハ斷はるどの仰せゆえ出家の思ひ止まり行者の爲めは信徒
の募集を盡力せよとの事ま已むを得ず再び出家の事を云はず指圖の
儘ま立働らさしが其後の二人とも内輪の事より遠ざけられ行者の様
子さへ見るとならぬ身分とありしかば愈々探偵の便りを失ひ本意な
く其日を送りける



みかややりたし書く手の持たぬ

豊吉の悴猪之助ハ西新井よて見初めてより且暮忘るし隙なくて想ひ
焦れし若代姫が其夜雨風の厭ひなく行者の許へ詣づるハ渠も我身を

二百十四
 戀慕ひ同じ心の偽信心大師の利益を受んより顔が見たさ日参と思
 ひし事いあだよして渠の心を稚兒よ寄せ尼となりても諸共一ツ庵
 よ栖みたしと願ふと聞て妬さ堪へねと稚兒の物さへ得云いぬ癡人
 と知れば愛想も盡さん殊よ乙女の移り氣よて情を早く通はしなば我
 よ靡かぬとあらじ折もやあらんと忍ぶれと色よ現はれ父親が戀よ心
 を揺くよと憐を察し海三等よ其媒介を頼みしよて假の姿の稚兒色葉
 物こそ云はぬ愛し契りを結びてからの其戀しさの彌増して夢よ見る
 夜も多かりき想ひ亂れて氣も沈み一室よ籠り鬱々と一人心を焦さん
 より運動がてら根岸よ赴き姫が參詣を待受けて顔など眺め慰さん
 と日和を窺ひ道場よ休ふて待てど此節の姫も何等の碍りよか日々來
 り詣でぬのみか偶々見ゆるもいそくと色葉の顔よ見惚るゝのみ温
 尾の寮で近付きよなりしを今い忘れし如く我方さへも見向かぬい過
 ぎし契を我とい知す一途よ色葉の情ぞと思ふて慕ひおるものならん

よし海三おげん等が迷惑するも戀ゆるゝの憚かるゝのなるべきぞ人
 目の關の多くして口よいそれと云ひ難きも筆よ其夜の始末を云はし
 て假の姿よ實を明かさば想を爰よ回らして心を我よ移すべしそうじ
 やと私かよ點頭きて喜ぶ効もなさけなや愚かな性どて父親が甘く育
 てし報るよて大師を信仰しながらもいろは書くと知らぬ身の心の丈
 も盡されず去りどて斯る艶書を人よ頼まんやうもなし思ひ屈して殊
 さらよ病の種をます鏡うつらふ色よ面瘦せて戀よ朽なん風情なる哀
 れを察し父親が又も海三おげんよ謀り行者の口をかりの縁結びとめ
 んど方便を設けて行者よ請ひしかど斯る大事を突然よ示諭せば歸依
 者も疑ふて事を果たさぬ虞れあり然れば何等か温尾家から祈願の筋
 のある時よ併せて佛の示諭なりと具しやかよ傳へなば恐れて必ず信
 服し我がいふまゝよ行ふべし暫く時を待つこそよけれと云はるゝと
 の道理なれば假令伴が戀ひ病みて死せんとするも再び請ふと稽の葉

の廣き世界より子を持た親の心の斯うしたものが子ゆるゑ病まんばか
 りなる胸の痛さを今ぞ知る苦しき中猪之助が食事と共に細りゆく
 其魂の緒を絶へざるやう假し心を慰さめて行者が頼みの方便を施こ
 さるしまで續がんと思ひついたら一工夫早や上棟も相濟みし大師の
 堂の造作も日ならず功を竣ると云へば入佛供養も近きま在り其當日
 の講中にて幼き子供のゐる人の稚兒も仕立てて供養の列に加ふる爲
 め互ひに美麗を競ひあひ今より支度し心を推し奔走なしておるとい
 ふ悴の今年十七なれど姿の瘦せて小兵ゆる扮りやうよて随分幼く見
 ゆるの必定殊も標致も人並に優れてやさしき方なれば美服を着けて
 押出す時の色葉も優りて人目も付かん元來若代が色葉を戀ふ其人
 柄もよるゝあらず稚兒の姿の優よして品よき所も眼を奪はれ遂も心
 も現となりしよ囚るものならん然れば袴を稚兒も装ひ若代の眼を惹
 く時の豫て海三おげんより先の夜色葉も扮せし猪之助なりと聞き

おるからよ忽ち心之も移りて渠の啞なり出家なり殊も斯うして見る
 時の猪之助の方美しくしと遂に心現とあつ挑まざして戀ふとよなり
 もやせんと勝手なる趣向のまゝを猪之助も話せば流石も羞らひしも
 久しく見ざりし笑顔もて其喜びの讀まれしかば豊吉の費を厭はず稚
 兒も装ふ假髪衣裳をそれへ注文して支度も餘念あらざりし

②の三界のくび枷

豊吉の我子の爲めよ心を推し漸々一策を案じ出し夫々支度整へて指
 折敷へ入佛供養の日を待遠しくぞ思ふらん
 新助の我子お若も逢いんとて漸々尋ね求めたるお常も逢ひのあひな
 がらお若の神戸へ伴れ行かれ今の音信不通と聞て一度の失望せしが
 養家の名前の慥かなれば假令外國へ渡るとして所在の分らぬ筈いなし
 隙さへあらば尋ねんものと心よ忘るゝ時のなけれど大師の堂の普請
 も掛り彼是用の繁きが上よ朝光から願まれたる秘密の探偵の届かぬ

べ双方少しく片付し上よて一週間の暇を貰ひ神戸へ出立せんものと
 心ならずも働らさかりしが上棟式も既や済みて用事少しく暇とな
 りしも行者の事を根問せし爲め四十七は疑がはれ外の仕事も逐使の
 見合せ渠等の疑念を除くも若かず左れば此間も神戸へ赴き娘の所在
 を尋ぬる序で四十七が神戸に在りし其時の身分と摸様を探りて置
 加バ後日の参考となるともあらんと思案を決め其趣きを朝光に話せ
 し處探偵用として若干の旅費を給與せられしかば新助の喜びお常よ
 り娘お若と養家へ宛てたる書状を請受け四十七より親族の事も關し
 去り難き用事の爲め大坂まで赴くと云做し二週間の暇を貰ひ即日横
 濱出帆の涼船に乗込み神戸を指して出立せり
 かげんの種々よ心を悩まし我子京丸を温尾の家督も立てんものと謀
 りし事の十又八九の運びしかど弘則が娘若代も家を譲らんとて頻り

養子の事を促がすも若しや若代の心が變り養子の事を承諾せば
 望みの忽ち絶ゆべしと若代が色葉を懇慕ひ出家の望あるを幸ひも一
 時養子の沙汰を拒みおかしが弘則の斯る事情を知らざれば切りも事
 を急ぐより豊吉へ談合のすへ行者の口を借りて弘則も養子の事を斷
 念させんと計りしかど行者の斯る一家の大事を歸依者も指圖するの
 宜しからぬと家の爲めとあるからの随分指圖も致さんが弘則も疑念
 ありて其詮なれば其前も人々より弘則へ此儀の行者の判断を請
 ふの外なしと説き論じ本人も於て心から我も判断を請ふに至らば願
 みの赴き含み置きて悉しく指教致さんとの事もおげんの喜び一日弘
 則も打向ひ豫て羨しどもへ仰せ聞けられた御養子の儀の羨し共も至
 極結構の事と存玄段々嫌を論じましたが母上様の菩提の爲め出家を
 遂げたいと強てのお望みゆる其のお心得違ひありと海三からもお諭
 し申し且つ變死なされし先奥様と羨しの母の菩提の爲めよ羨しか

ら大師堂へ須彌壇をも寄附致せしゆゑ行者が充分御供養をなさる筈なればお若い身よて御出家などなさるゝ及べぬと父様の思召も従ひ早う御養子をお取りなさいと再三お勧め申しましたか親の言葉も背くの不幸ゆる父様の思召通り養子を買ふ時の母様が御存生中我が亡き後の出家して後世安樂を祈つてくれと仰やうたお言葉も背き母様へ不孝とあり身一ツよて両親へ孝行を立てるとが出来ぬゆゑ何方へ従ふてよいか行者様も判断をして戴きたいと仰やいますか如何なものか思召を伺ひたう存じますと詞巧みも欺くを實と思ふ弘則の掛さぬりし手を解て「實の筆子が變死を不便と思ふよりせめて其子よ家督を譲り其亡靈を慰めやうと思ふての事じやが本人がそれ程までよ出家を望む所へ無理も養子をして和合の程も心配である去りとて輕々しく出家させて世間で本人の望みどの思はず其方が先妻の子を疎んじたのでいあるまいかなといふ噂をされるも心苦しい事

でないか去れば娘の望み通り行者へ判断を願ふて兎も角も致さう承まはるゝ近々入佛供養があると云へば其節參詣して娘の身の上の勿論一家の運命等の事も伺ふと致さうと子ゆるゑ苦しむ分別も迷ひ亂れておげん等が工みの畏懼りしこそ愚かなれ

⑫ びで鯛を釣る

普請漸く出来せる大師の堂のさして宏大といふゝのあらねと観造りの惣彫物巧を盡し美を盡し外の圍ひの瑞垣の寒水石の上磨き寄附者の名前を彫付けて朱を入れたるを憐むのみ間も長き廊下を取付け従來の建家も續けて此所を信徒の溜りとす諸講中よりの奉納物の其境内も山を爲し納め手拭と提燈の掲ぐる所なきまで堂の入口正面も内輪實を白く染抜きたる紫色縮緬の幕と打張りて其中央を引絞れり其内も朱染の長提燈を幾許ともなく掲列ね靈前もおげんが寄附の須彌壇を据へ上も信徒が先を競ふて納めたる種々の佛器と造花

起 縁 は ろ い

を所狭まで飾りたれば金色燦爛として眼も眩めくばかりよて新たよ
 刻みし大師の靈像の行者が坐せるも齊しくして鬻こそなけれ其面相
 何所となく行者も肖たるも不思議なり今日入佛の供養とて府下町々
 の云ふよ及ばず近郷近在遠く流車の便を借り朝まだきより輻湊する
 信徒の數の幾千人皆な夫々よ美を飾り華を裝ひ我れ先きよと講名を
 記せる旗を押立て練込み來たる群集雜沓の中々よ筆紙よ盡すべうも
 あらず又講中の世話人よて稚き子供を持てる者今日を曠れと費を
 惜まらず子供を稚兒よ裝ふて列よ加へし美むさの體へんものどてな
 りける扱て本堂よて午前十時よ百味の飲食を捧げ行者の常の裝ひ
 よ異ならず色葉を從へ悠々として靈前よ坐し式を以て讀經供養を修
 し諸講中の爲めよ祈念を行ひ夫より三十餘名の稚兒を整列せしめて
 撒華と靈符を盛りたる淨器を持たせ色葉よ柄香爐を把らして先導と
 ちし行者の獨鈷と念珠を携へ圓頓止觀の呪喝を默誦しつゝ道場の周

題 縁 は ろ い

園を七回練り廻りて結縁の爲め靈符を參詣の人よ配付し華を撒して
 其式を了りしが參詣の群集の尙ほ引もさらず本堂よ於ての講中の重
 立たる者よ折詰の辨當を饗し世話人よ酒肴を侑むるあど内外の賑
 ひ根岸よての古今未曾有といふ程なりしか府下よ大師の靈場の一
 ツ増しいつまでも繁昌なるべしと信者一同喜び祝すも世の中よ愁を
 離れて神佛を信仰する者の殆んど稀れなり此靈場の一時よ斯く繁榮
 を來たし入佛供養とて奉納物の山を爲すの皆是れ信者が其寄附の金
 高より遙かよ優る幸福を得んどの心あるよ由るものなり去ればおげ
 んも多くの佛具中よて最も目立て金色の輝く三百餘圓の須彌壇を寄
 附せしも我子を世よ立て富裕なる華族温尾の家を押領して海三と其
 淫樂を恣まよせんと願望なり去れば此日の我が運命の定まる日
 なりと早朝より弘則を勸め腰元よ京丸を抱かせ若代を伴ひ此道場よ
 詣ふで別間よ扣へて供養の了るを待ち行者が休息の時を窺ふて弘則

二百二十四
 等ハ四十七の案内ニ依テ行者ニ而講シ言短カ今日の祝詞を述べ此
 式祭の期を幸ヒ我が一家の運命を占ヒ玉ヘと懇願せしかバ行者ハ直
 ち心を得テ更ニ祈念を修シ豫テ用意の事なれば速カ念珠を収め
 「私ハ是マで歸依者の未來の事ハ害があるゆゑ頼まれても判断をせな
 んだが其許の頼みの重ニ現任の事であるニ依テ少しばかり未來ニか
 かる事のあるが信心よめんじて云はうけれど聞た上で其通りよせぬ
 時ハ佛を弄そふといふもので得られる幸福も忽ちハ福害とある程ニ
 誓ふて示現の通りよせよやならぬと云ふ事ハ合點であらうな」と念を
 押されて弘則ハ頭を下げ「勿論の事何とて御教訓ニ背きませう」去れば
 云ハふが其許の家ハ女ハ不幸のある家トヤ其許の母ハ疫病で死ニ妻
 ハ刀物で死ニおげんどのが其許の妾ハなつたばかりで其母も變死シ
 たおげんどのが無事であるハ男の子を生んだ功德ト大師を信仰する
 利益トヤ既ニ娘御の頭の上ハ厄難が落ちかゝつておるニ依テ早ラ

外へ出してしまハねバ爲めよわるい此娘ハ佛縁の無い性ゆゑ信心な
 ど止めて身分の下者へ嫁ム行くと末ハ幸福なる何でも其許の家
 ハ男の血統で嗣で縁の遠い所から嫁を貰ふやうよせぬと禍害が絶え
 ん其許が退々幸福なるものも近い所から貰ふた先妻が死んで縁の遠
 い女を後妻よしられたからの事トヤ夫れだけで大抵ハ分つたらうと
 思ハ御告を粗末ニ心得てハなりませぬぞ」と説き示されて弘則ハ有り
 がたしと再拜しおげんハ是マで大願成就ト心ニ十二分の笑を含みし
 が若代ハかりの望を夫ハ行者が示諭を怨めしと見やる目先を遮る雜
 見色葉ハ目元ニ多少の愁を含んで若代の方を眺めたり



さよと糧を贈る

豊吉ハ行者を爰ニ勸請せる發起人でありながら何故カ行者ニ疎んせ
 られ四十七の爲めニ威權を奪はれ今ハ講中の世話人同様の扱ひを受
 け不平ニ堪へねど此道場ハ爲めハ多くの資本を費やせしとなれば

起 縁 は ろ い

辭して去るも口惜しと僅かの利益配分を受けて通勤をなし居たるが愈
よ入佛の日の決定せし時四十七より其利益配分をも斷り以後の若干
の月給よて勤むべし若し不承知ならば除名するの外なしと云開けし
ゆゑ一時の大に怒りしも地所と是まで費やせる金圓の皆な行者へ寄
附せし者よて之を宛やこう云争ふの權利なければ只四十七の處置を
を不當と怨むのみ直も除名を乞はんとし思ひしかど我子の爲め
豫て待ちたる入佛供養の濟むまでいと胸を摩りて堪へ忍び此日の悴
猪之助を稚兒よ扮して供養の列よ加へ若代の心を奪はんと始終様子
を窺ふのみ道場の事ハ拙々しく扱はざりしかかねての頼みを行者の
忘れず大師のお告と云做して弘則等を諭されし次第を悉くおげん
から鈴かゝ傳へ聞きしかバ悴の望みも遠からず叶はんと喜びて少
し心よ勇みを生じ酒宴の席よ列なりて酒杯の數を過し忽ち醉を來た
せしゆゑ其坐を去りて今日未だ事よ紛れて拜まざる大師よお禮を申

起 縁 は ろ い

さんと一人内陣よ立入りて其所等の飾りを見廻すうち醉眼ながら目
よ付きしに靈像の前よ据へたる金緑蠟塗の經机の上よ恭やしく供へ
たる經卷よて其表装の綿切の縷よ上野の公圖よて若き男よ持行かれ
し大師眞筆の經卷よ紛ひなければ密と取上げ披き見るよ是ぞ正しく
行者の心を得んためよ漸々己れが手よ入れし品よ相違のあらざれば
直よ寄附者を取亂し出所を責れば糞よ盗みし男も分り其時我手に殘
りたる位牌の再び失ひしが亡父の家族の在所も分らんそうじやと經
卷を懷中せしが待て暫し若しも早りて荒立てなバ寄附者も恐れて或
の實を明かすまじ只何事も知らざる体よて悉しく様子を探るよ若か
ずと思ひ直して經卷を舊の通りよ供へ置き帳場へ戻りて四十七の隙
を窺ひ只今内陣を拜見した處見事な經机があつたが何所からの寄附
ですと何氣なく尋ぬるよぞ四十七の吸ひかけたる烟管をはたきあれ
かあれの不思議な經卷と一所よ靈像を彫刻した佛師屋が寄附したも

ので中々安い品でない「フムお成道の佛師屋が寄附したのですかそ
して不思議な経巻といふ譯で「昨夜佛師屋の親父が來ての話
は十月初頃の事とか其悴が餘所から注文の位牌を帛紗と包んで持て
行く途中上野の公園の腰掛で休んだ時急いだまゝ側へ居た人の帛紗
包と間違へて先方へ持て行て見ると立派な経巻ゆゑ直に引返して見
ようといふ思つたが時間も経たぬ所詮其人は會ふといふ出来まいと
夕刻まで先方で遊んで宅へ持歸つたのを親父が見ると大師様の御眞
筆ゆゑ頼りな欲くなつて其筋へも届けず大事にしてゐると問もなく
此方から大師様の靈像の彫刻を頼み引續いて温尾様から高金の須彌
壇を注文されたので佛師屋の全たく其経巻が手引をしたものと有り
がたく思つたゆゑ入佛供養の祝ひかた「経机を添へて奉納したも
ので又其時跡へ残した位牌も間違ひの一ツで實に温尾様の別荘へ納
める品を持て出た積りの處池の端の越出とかいふ家から注文の品を

持て出たゆゑ経巻の主の手より越出の位牌が残つてゐるのだが是も
何かの因縁といふものであらう併し此事が餘り世間へ知れると佛師
屋が迷惑をするから他言の無用よして」と後より己れが敵となる便りと
知らず物語る始終を聞きて豊吉は頻りに點頭さ不思議のこともある
ものと思ふ心を覺られしと四邊を見廻はし「面白い話ようかれて日の
暮れるのを忘れて居たそろく「明りを點ける支度をさせねばならぬ」
と忙はし氣を立ち行く

あ たま隠して尻かくさず

高野に残す貧女の一燈佛の目より功德と光を放たんが凡夫の目より
万燈の輝くこそ尊とけれ大師の靈前より信者が捧げし數百の蠟燭光
り輝き楯と楯の隙間もなく掲げ列ねたる奉納の長提燈と丸提燈の朱
色も燃んばかりは火を點したる明るさの晝を欺く如くよて夜景の殊
よ華やかよ參詣人も群集して又一層賑はひぬ扱もおげん兼て豊

吉と談じ合せし旨もあれバ猪之助が稚兒扮装を幸ひよ若代も引付け
早く納得させんものと密かと思へバ夜の賑ひを見物せしうへ歸りた
けれバ夕刻海三を迎ひよこして弘則も乞ふて若代と共に跡を
り何かよつけて猪之助を手元よ招き若代の側よ坐らして親しく話を
させんと思へど若代の行者の示諭も望を失ひ物悲しくて鬱がちなれ
バはかくしく猪之助の顔も見ず最と疎とまじき素振なるを猪之助
の強面しと思はぬよのあらねどうら羞かしきまゝ何事も云得はず
じうじするのみなるをおげんのもどかしと思へども見る目の繁き場
所なれば強ちよせめもあらず此身が側を遠く離れて二人を一所よ置
きよせバ却つて語らふ便りよならんと迎ひよ來ておる海三よ目くバ
せして和子よ小用を達させんと腰元を伴ひ海三と別々よ奥の方へど
其場をばづし暫く其所よ休息する隙を窺ひ若代の稚兒の顔見たさよ
密と坐を立ち客室の縁を曲り行者の部屋よ續きたる小暗き廊下の入

口よ悄然立ておるぞとの知らぬ色葉が何用か雪洞片手よ急ぎ足此方
へ來るを嬉しやと遮ざり留むる若代の顔を色葉のつくく打眺め涙
を浮めて片手を振り來てのわると教ゆる状を解らぬ若代の袂よす
がりお情ないといふ口を色葉が押へて推戻す力よ二人のよろめきて
其所へドツカリ坐したるまゝ若代の色葉の膝よ打伏しいつぞやのお
情忘れやらす又の逢ふ瀬を樂しみ居りし甲斐もなう今日師の坊のお
諭しよの佛縁薄く出家よもなるとならぬ身の因果慙れと思し玉のれ
と跡の涙よ聲くもり聞取りかねしのみならず戀と知らねバ色葉の惑
ひ唯手を振て制するを否む心を示すかと誤り解りて最と悲しく俄か
よ差込む胸の癢痛しと悶へて苦しむを憐れと色葉が介抱する此方よ
親ふ猪之助が二人密かよ云合せ不義を爰よて働くかと誤り認めて嫉
さよ得堪へず己れ色葉があるからよ我的心よ靡かぬなり憎き稚兒め
が振舞かなどうしてくれんと思はずも腰よ帯せる短刀の柄の握れど

桐まて作れる木刀なれば打つとも効のあかるべし口惜と俄かよ心付
又小柄ばかりの眞物よて先刻梨子を刺きたるよて其切味も能く知れ
り人の居らぬを幸ひよ之よて渠を刺殺し邪魔を除かば若代の我手よ
落つべしと鈍くも太き心を發し小柄を馬手よ握り持ち偷足差足親ひ
より不意よ横から雪洞を蹴反しながら弓手よ色葉の前襟を捉るより
早く咽元へ小柄をグサと貫けパアツと魂消る聲よ驚き若代もアレ
と叫びしよて人の來ぬ間と猪之助の早くも其場を遁れ出で素知らぬ
顔よて本堂の信者の中よ打混り銚かよ様子を見えりうち變事ありしと
人々が立騒ぐまゝ態よ驚き慌てつゝ現場よ驅付け様子を見るよ正し
く咽を貫きしと思ひし手元の狂ひてか左の頬より口中へ刺徹したる
重傷よて色葉の一時氣絶をせしが人々の介抱よて漸々蘇生をせし折
から雑沓の塙所取締の爲め出張の巡查が來りて醫師を招き速かよ手
當をして程近き病院へ送り扱て何者の所爲なるかど一時の若代は嫌

疑もありしが其云立の明白なるよて扱ての如みて何者か爲せし事ぞ
と殿しき詮議よおげんと豊吉の疾くも猪之助の所爲ならんと察せし
かど證據のなきを幸ひよ誰の所業か憎むべき事なりと多くの人と共
共よ種々の噂を爲すうち朝光からの頼みを受け銚かよ秘密を探偵
する京千吉の爰らが功の仕どころと銚かよ巡查へ耳語きしよて巡查
の心得猪之助を呼寄せ其短刀を檢めしよ木刀なれど小柄のあるべく
して無きよ不審なりとの尋ねよ愚かながらも其痕を蔽はんとて元よ
り小柄の無かりしと立派よ申し立てしよて側よ聞居る豊吉等の初め
てホツと息を吐き賢こき奴と喜びたるの束の間よて二名の巡查の手
燭を照らして色葉が負傷せし場所の邊を隈なく尋ねて猪之助が慌て
て逃る途中の椽の片隅よ取落したる小柄を見出せしかバ血よ塗れし
まゝ持來りて猪之助の木刀よ合し試むるよ別物あらねバ如何よと問
へど猪之助の尙ほ伏せず偶々工合の出あひしのみ決して己れが品よ

起縁はろい

あらずと陳ずるを先刻より黙して側へは聞き居たる四十七の色葉は
 傷を負ひせしを憎しと怒り又堪へざる上斯る證據のありながら尙
 ほ陳ずるの大膽なり殊に其父豊吉の何かよつけて邪魔なれば之を幸
 ひ除名して再び物を云はすまじと腹立たしきまゝ進み出で猪之助如
 何に陳ずるとも先刻爰の帳場にて梨子の皮を剥きたるの共小柄の
 あらざるか銅七子と紅葉の打出し色葉と縁のあるのも不思議から紅
 の血塗れ仕事此清淨の道場を能も穢してくれたるぞと嗚りつけ
 られ猪之助の色蒼ざめてブル〜と戦へて泣かぬばかりなる我子の
 罪を發かれて嚇と怒れと豊吉の爰にて事を争ふの却て悴の不爲ぞと
 おげんと顔を見合せて溜息太つく〜と其身の因果を嘆ちける巡査
 の何の容赦もなく證據の品を携へて來れと猪之助を引立てたり

○

はらぬ神も祟なし

豊吉の兼て山氣のある者ゆゑ一度行者の不思議を見て偽信心と誠を

起縁はろい

示し勸請なして信者を募らば坐して利益を得んものと多くの金を費
 やせしも四十七の爲め押領されし口惜さなまなかなか怨をかわきたる
 前非を悔て脱講せんと決心せしが子の爲め入佛供養の了るまで躊
 躇なせしが變事の基ひ悴の所業の宜しからぬと蔽はゞ罪を遁るべき
 何の遺恨か四十七が入らざるを云立てしみて遂に猪之助が拘留の
 身となりし前後の始末を考ふれば皆是れ我身が行者と關係せしと因
 るものなれば又もや祟のあらざるうち脱講せんと其翌日四十七等も
 除名の事を云入れしと渠等の始終怒りを含み足下が更み乞はずとも
 既し我等が行者と謀り講中よりの除名せり今後決して道場へ足踏す
 るなど不當の挨拶あまりの事と豊吉の心も怒れと争ふて詮なき事と
 斷念て何よも云はず立去りしが悴の事の心も懸れば手を廻し其後の
 様子を尋ぬるも色葉の負傷の灸所を除け殊に傷口も小さきゆゑ不日
 よ全快すべき見込のよし又猪之助の一通り手續きの調べを受けたる

まゝ拘留所くわうりゅうじょに閉ぢられおるこの事ことも少しの心を安んぜしが尙其筋なごりの
人ひとは就つき事情じきやうを述べて嘆願たんだんの仕様しやうもあらんと思案しあんの途中ちゆうちゆう背後はごから呼
ぶ者ものあるを誰かど見れば千吉せんきちなるよぞ最もはや道場だうじやうの奴等やつらも用もちなしと
聞きえぬふりよて行過ゆきかるを千吉せんきちの逐來しゆくらいりて袂たもとを引留ひきどめ「昨夜こゝろのとんだ事
で嘸な御心配ごしんぱいでせう内所うちじよで済すむものを四十七しじゅうしちさんが餘あまりなき事ことを云いたば
かりでお氣きの毒どくな事ことなりました併しかしたいした傷きずでありませんから
格別かくべつなお咎とがめりないと思おもひますが手を廻ましてお掛かりの役人やくにんへ内情ないじやうを
話はなしておく方がお爲ためめ宜よろしいと思おもひますお掛かりの池いけの端はたもお住居すまひ
の警部けいぶさんで越出こしだといふ方かたです貴所あなたがお一人ひとりで行いきよくけれは私わたし
が御案内ごあんないを致いたさせう」と信切しんせつらしき忠告ちゆうこくの豊吉ゆふきちが四十七しじゅうしちの處置しちぢを憤
ほりおるを幸さいひ我手われても付けて道場だうじやうの秘密ひみつを探たづねる便たりよせん手段しゆだんと知
らぬ豊吉ゆふきちの頼たのみ所ところと筋すぢかよ喜よろこび殊ことも池いけの端はたよて越出こしだといふの先まよ一
旦手いたも入りし亡父むしやうの位牌ゐはいの注ちゆう文ぶんなるとの昨夜こゝろ四十七しじゅうしちの話はなしの端はたよて

分わりしゆゑ今朝けさの訪とはんと思おもひしよ意外いがいの椿事つばきごとも遮さぎられ忘れおり
しが其人そのひとが悴せがれの吟味ぎんみの掛かりとの不思議ふしぎの縁縁の繋つながりならん好よい事こと聞
きしと思おもひしが不人ふにん情じやうなる四十七しじゅうしちの手下てしたも屬ぞくする千吉せんきち等らも事ことを頼たのま
は此上このかみも如何いかなる祟たたれを受けんも知れず關係くわんけいせぬが上策じやうさくと胸むねを定さだめて
面おもてを和なげ「御信切ごしんせつ忝かたじけけなうの存ぞんじますが私わたしの私わたしの了見りやうけんがありま
すから打捨うちすてつて置おけてくださむ最もう私わたしの講中かうちゆうを除名じゆめいされましたから」
と愛想あいせうの涸かれた挨拶あいさつも扱あつて怒いかりを我等われらもまで移うつして言ことを疑うたふかと思
へば更さらも語ことばを更さらめ「今朝けさ除名じゆめいの事ことを承うけたまはつて驚おどき入りました道場だうじやうの
事ことも付ついての發起人はつしじんで最初さいしゆから一方かたあらんお骨折こせつもなつたのは猪之助いのすけ
さんと粗勿そぶがあつたとして何なんも貴所あなたを除名じゆめいするよと及およばぬ事こと是れこれの全
く四十七しじゅうしちさんが自分じぶん一人ひとりで好よい事ことをしやうどの工たくみも相違さうぢありません
私わたしじきども喰くふも困こまるから餘儀あまなくあしして居ゐるものゝ面白おもしろくない
事ことばかりです大骨おほねを折おつた入佛にふつ供養くやうの晩ばんも血ちを見るみるの科人しやうにんが出るでるのと

いふ怪事のあつたの道場の寂れる随相でせう早く講中をお脱けな
すつたのり却てお仕合せでせう」と慰さむるを豊吉の憎しと思ふ心か
ら我を嘲弄する事と聞き僻めて眼も角立て「ハイ四十七さんの悪いの
でいありません皆な私しが不行届で地所も身代も失した揚句馬鹿な
悴の爲め除名されたのハイ仕合せであります仕合せといふもの
の斯ういふ悲しいものでありますお前さんも四十七さん又頼んで早
う仕合せなは身分よおんなさい」と云捨てし跡をも見ず立去りけ
る

丸もつりかた

豊吉の共翌日早く越出を訪はんものと思ひしかども其心配の烈かり
し爲め胸の痛みて堪へられねば心あらずも藥養も空しく二日を費や
して少し氣分の快きまゝ急いで越出を尋ねし何ぞ計らん朝光と
いふ江戸の邸も生れしものにて顔の知らねど同藩の士族にて其女

房の現在自分の妹なるより我れ得て再び失ひし亡父の位牌の妹が先
の夫として今の自分の仲間なる新助の手から戻りしと聞くも不思議
の其上又其時失せし經卷から妹の在所を知ると同時又悴の吟味の掛
官朝光との逢ふといふ纏みし親身の泣寄りよお常の何かいふべき
と掻摘んだる始終の話又豊吉の父が其後の心勞と妹が艱苦の有様を
察して其身の不孝不實を詫び尙ほ朝光又恩議を謝し既往の罪を咎め
ずして以後の親しく交際を仰ぐと聞て朝光の既又千吉の内通にて豊
吉の深く四十七の所爲を恨みおると知るから又妻の兄たる縁又依り
行者の秘密も聞き出すべし殊におげんの頼みを受け假も實家とあ
りし者なれば海三等の奸計も必ず知ておるおらんよき人來ぬと筋か
よ喜びその云はるゝまでもない妻の兄なれば拙者の爲めも兄御ゆ
ゑ自今の弟と思召しお心安う願ひます就て先夜の事變定めて御心
配の事とお察し申す」といふ尾まついてお常も側から色々のお話よ

紛れて申し遅れましたが先夜のこんな事で無御心配でありませうが
 稚兒の怪我が軽いと申すことでもあり謀殺未遂などいふやうな事
 だ事でありませんから「イ貴郎」と夫の語を促すも朝光の引取りそ
 うサ元々一旦の怒で仕た事ゆゑ情の酌量しやうが幾許もある依怙の
 處分の出来ぬが幸ひ拙者が掛りで調べる事ゆゑ不為事致さぬか
 ら心配せずとざるがよい何分宜しう願ひ申します貴所がお掛り
 と承まひり誠又安心致しました「イヤ喧嘩同様な事の調べり誰がして
 も同じ事であるが實の夫から際がった外の事を調べねばならぬゆゑ
 拙者が引受けて致すのじや「へー外のお調べと仰しやるの「妻の兄じ
 やが行者又關係のあるお前さんよりナト申しかねる」と其實豊吉が既
 又脱請して行者又關係なきを知ていおれど其口占を引いて心情を探ら
 ん爲め斯く答へしものと知らねば豊吉の「未だお話し申しませんが行
 者又關係してとんだ損耗を致した上又四十七の仕方が何分面白くあ

はろい

起 終 は ろ い

りませんから今度の事のあつたを云立て又講中を脱けて去まひ今で
 の行者又恨みこそあれ少しも關係のございません「關係がなければお
 話し申さうが行者の怪しい事勿論四十七といふ奴がどうも尋常の
 者でないといふ鑑定じやがお前さんの何と思はれるなそう仰やれ
 ば不審な事が幾許もあります併し私じとも一向内幕の事が分り
 ません官での大抵御探索となつておる事でせう「大概探偵も届いてを
 るが只行者と温尾家の關係が少しも分らんア温尾家の事又就ては御
 存じあるまいが御親父倫齋先生が非常又御心配なすつて御臨終の際
 までも拙者へ後の事を頼みとなり何卒お家又瑕のつかぬよう好物
 等を退けてくれとの御遺言であつたゆゑ身命を抛つても此事ばかり
 の仕遂げやうと盡力するものゝ些とも證據のあがらんや殆んど
 當惑致しておるが何か御聞込みの事あるまいか」と豊吉の口からお
 げんの假親となつておると云はした上で追々又問ひつめん爲め又羅

起 縁 は ろ い

けたる畏と知らねば豊吉の何を隠さうやうもなく是までおげん海三
 を哀らぬ者と知りながら親しくせし一途は我子の戀を遂げさせた
 ことの心のみ然るゝ事の成らんとする間際短慮の振舞して自ら事
 を破りし上の最はや若代の縁談を纏めるといふもならし去れぬ哀ら
 ぬ工みある海三おげんは此末親しみ交ひるの音も要なきのみならず
 此身は嫌疑を招くの基は殊も亡父が最期の際まで心勞されし奸物と
 い即ち海三おげんの事我れ幸ひは渠等が工みを知るから父の靈位
 の前は於て昔時の不孝の大罪を償ふ爲め秘密を遂一朝光は語り聞か
 して温尾家の安全無事を計る助けを與へんと思案を爰は決めければ
 豊吉の朝光は向ひおげんが海三と密通せるの己れ本妻は登つて其子
 を後嗣と立て温尾の家を押領して間がよく主人をも亡きものとし
 其淫樂を恣まふよせんと企てなるがおげんの母がそれを覺り正直
 一途の心から痛く意見を加へ若し改心せぬ時の海三と密通の事を主

起 縁 は ろ わ

人よ告げんと云ひしより遂に海三と謀り去る八月五日の夜老母を殺
 して火を放ち其家を焼きたるとい其夜出火の少し前人形町通りの
 露店にて洩れ聞きたる二人の立話にて察せしゆゑ其後行者の事又付
 入用の金子を無心するをり暗に其立話の事をいふと二人の顔色蒼々
 かり云ふが儘に金子を與へしよて愈々其推量の誤らぬを知り又其實
 子を後嗣と立てんとい若代姫は難癖つけて養子の沙汰を妨げんと思
 ふより私しの悴猿之助が姫は悪想してゐるを聞きて姫を媒介たんと
 云出でしゆゑ悴も之を喜び姫の既我物なりと思ひおる折から姫
 が色葉と密談の所を認め妬さる地へすして前夜の所業も及びしなら
 ん自分がおげんの願みより其假親となりしといふも縁を纏めて悴
 の望を叶へてやりたき心のみ別は仔細のあるとならずと我が不都合
 なるとい蔽ふて巧みは語を飾り一伍一什を打明せば朝光も豫て已
 れが探知せる事實と符合するのみか慥か又密話を聞きしといふ證據

のあれは最はや猶豫のなり難しと尙も不審の廉々を悉しく尋ね了る所へ至急の内談ある旨よて探偵長が来よければお常の豊吉を勝手の脇なる小坐敷よ伴ひ其場を避けてシンミリと別後の事共語りあふ此方の書齋よ朝光の探偵長と膝突合せ「至急の用どの何事あるや生憎非番の時よ方ッて御足勞をかけたなり」と謝するを拜して探偵長の手帳を開き「實よ椿事が出来しました色葉の女でありませうして口をささます「エそんなら啞の偽はりであつたか」「イ、エ啞であつたよは相違ありませんが口中よ傷を受けたので物が云へるやうよなつたのを見へます「ハ、アそれの不思議それでいませで男よ作ッておつた譯も分つたであらう」まだ口中の傷が充分治りませぬゆゑ語がはつきり分ませぬが追々分るやうよならうから成るだけ今の内の物を云はせぬやうよして傷の治るのを待つが宜しいと醫者が申しますからまだ何よ尋ねませんが彼奴が物さへ云へば行者の秘密の残らず分るでせうと

起 縁 は ろ い

思まじ「成るほどそれで」行者の妻じやナ啞といふもどうかして物の云へぬやうよしておいたののでいあるまいか「私もそうかと思ひましたゆゑ醫者よ聞いて見ましたら決してそうでない一体ハテ是から解剖の講釋ですから暫留めて來ましたエ、ト人間の喉よ二ツの道があつて息をする方を氣喉と申して之の肺臟から出てゐる氣管の上頭で數個の軟かい骨で出来ておつて上の方の舌の根と下顎の骨よ連いており下の方の氣管よ接いておつて其氣喉の内部の左右よある調聲帯といふ二枚の膜の間よ一寸とした口が開てゐる此口を聲門といふて聲の出る孔でありますが色葉の聲門の前の舌の根よ大きな疣の様なものがあつて其孔を外から塞いでおいて調聲帯と舌の働きが自由よ出来ぬので是で物が云へずよありました處頬片から突込んだ小柄の刀尖で都合よく其疣を半分截取たゆゑ聲も出るやうよなるし舌も自由よなるやうよなつたので少し物が云へるやうよなつて來たので

起 縁 は ろ い

あると申しますして見ますと傷所が治つた上で其疾を取除けたなら
満足な物をいふことが出来るは相違ないこの事です道理こそ通常の
と違つて耳が聞えたのでありませ併し此事が世間へ洩れると調べの
つかぬうちに行者等も夫々用意を致しませうは依て極秘密にするや
うに申し付けておきました」が餘りも漏有な事でありませすから早速お
知らせを参りましたと始終を聞いて朝光の不思議と只管喜びて我も亦
不圖した事から海三おげんの陰悪を探り得たりと委細を物語り尙此
上の手筈をかまかくと密かよ課し合せたり

だんだん大敵

行者空善と奈良崎四十七の不意の棒事と驚きしのみか稚兒色葉が其
筋の手は掛り病院に入りしも啞なれば秘密を洩す恐れなきも其女子
なる事が顯はれなれば何とかなめを装ふべしと心配一方ならざりしが
萬一然る事あらば其不具よして依る所なきを慄れみ救助の爲め徒弟

起 縁 は ろ い

とせしも出家の側らよ若き女子を置くの世評を憚かる爲め宜しから
ぬ事と知りながら餘儀なく男子よ装ひしのみなりと申立てなれば別よ
嚴しき咎めもあらざるべし假令是まで同衾せし事が顯はるしも妻帯
の勝手の世の中別よ辱るよも及ばずと高を括つて平氣でおろしが色
葉の醫師の治療よより傷所の大方癒えしのみならず舌根の肉塊を截
取り聲門の障りを除きしを以て朗らかある聲を發し得るよ至り且つ
舌の根の痙攣が緩みたる爲め舌の動き自由となり初めて喰いふとを
得しかば其喜び譬ふるよ物なく天地と共に醫師を拜し禍害の爲めよ
幸福を得たれば猪之助よ恨みなし何卒渠の罪を免し玉へと嘆願する
よ至りたり去れば警部越出朝光の筋かよ色葉を警察署よ喚迎へて其
身の素性來歴より行者の秘密を尋問して一伍一什を聞取りたり今其
大畧を記さんよ色葉の元と横濱よ生れ母お常なる者が病氣の際七歳
よて同所の何其方へ養女よ貰ひれ程なく神戸よ引移りし處其年の秋

起 縁 は ろ い

口中舌の横より小さき疣の如きものを生じ次第より大きくなりしを以て
 醫師より治療を請ひしは是れ重舌といふものなりとて切斷せしは膿
 膿汁出でし程なく平癒せり夫より一年餘を経て今度の咽の前なる舌
 の根より再び前同様の物出来て速かき腫れあがりしかば又醫師より治療
 を請ひ針にて刺し膿汁を去りしよて重舌の一時小さくなりしかば廿
 日程を経て又元の如く大きくなり又刺して膿汁を去りしよ又廿日ば
 かりよして元の通りよなり幾度治療するも直ちよ元の通りあるより
 終る倦んで其儘よ捨て置きし處追々よ聲が涸れて遂に物さへ云ぬと
 よなりしが場所の宜しからぬ爲め醫師も恐れて切斷せざりしゆる生
 れもつかぬ啞となりし折柄養父母の支那人よ雇はれ上海とやらへ出
 立する際痲疾者なりとて棄てられしに十歳の時よて其後の乞食をし
 て漸く生活してありしを行者空善よ救われ夫より共よ諸國を廻るう
 ち挑されて己むを得ず同金するよ至りしが行者の頗る悪人よて神戸

起 縁 は ろ い

よ於て惡意よせる四十七と謀りて東京へ來り惡事を謀し合せて去る
 頃西新井の大師の境内よ於て四十七が子分の者を使ふて豊吉と弘則
 を誑らかし其信心を起させて豊吉よ勤め行者を根岸へ勸請させ其後
 弘則の娘が失ひし時計を拘摸から買受け置て四十七等が弘則の邸へ
 忍び入り大金を盗んで時計を戻し大師の示諭を證據立てし弘則等を
 歸依せしめ其他弘則の妾と家扶の軈みを受けて若代の家督相續を妨
 げ常よ信徒の身の上を探偵させて自分が判斷せし如く説き聞かせて
 其人を驚かして寄附金を促がし只管金錢を集るとを勉むるなど數へ
 盡されず又毎夜竊かき酒肴を部屋よ取入れ淫酒よ耽りしも四十七の
 外の誰とて之を知る者なし實よ言語同斷不埒千萬なる賣僧よて斯る
 賣僧よ身を穢さるしを口惜しと思へど啞よて訴ふると能はず且つ文
 字を知らねば書面を認むるとも出來ず常よ泣き悲しみてありし何
 等の恨みよや猪之助よ負はされたる傷の爲め物いふとを得るよ至り

起 縁 は ろ い

しの日頃信ずる大師の冥助を垂れ玉ひしと因るものならんと追々も申立てしよて初めて行者并四十七の秘密が判然し併せて海三おげんが奸計の一端とも分りしのみか不思議や色葉の我が妻お常と先夫の間と擧げたる娘お若よて實父新助の其行衛を尋ぬる爲め先日神戸へ赴きしが歸りて聞かば驚かん假令男よ装はずとも啞の色葉が我子どの思はざりしとお常も定めて驚くべしと思へど未だ公けの調べの了らざる際おれは斯る縁合なるとの告知らさねど懐かしきまゝ朝光の雀躍りして大よ喜び尙ほ追々尋問の廉もあれは色葉の物云とを秘する爲め色葉も内意を含ませ傷所未だ全快に至らずと吹聴して元の病院へ預け置き直ち空善と四十七を捕縛する手筈よ及べり

めの上の癪

海七おげんが邪魔ものなりと常よ心を惱ましたる越出朝光の漸くよして渠等の陰謀を探り得たれど其罪状を糺さんよ温尾の名前を出

起 縁 は ろ い

ださねばならず倫齋翁がくれも御家の瑕瑾よならざるやう計ふべしと申されし言よ背くの本意よあらずと思案を運らし其夜笏かよ温尾の邸よ赴きしが只面會を求めあば一旦不義の嫌疑を受け解職されし身よもあれ且つ海三等が途中で拒み所詮面會の許容のあるまじけれは警部の職よあるを幸ひ先の夜根岸の道場で奈良崎四十七の長男猿之助が空善の徒弟色葉よ負傷せしめたる事件よ付息女若代どのよ關し少々御意得たき事あれは暫時面會を乞ふと云入れしよて海三も我身よ係るとどの思ひもよらず若代よ嫌疑のかかりもせば却て我等の都合宜しと速かよ其旨を取次ぎけれは弘則の豫て娘へ嫌疑の及ぼす事もやど切りよ心を勞する折からよて警部と云へど舊臣の朝光なれは内情の頼みの届く便宜もあらんと直ちよ客室へ案内されしかば朝光の笏かよ喜び内談なりとて人を遠ざけさせ久しぶりよて舊主弘則よ面會し密談よ時を移して退出せしをおげんと海三の氣がより

なりと仔細を問へど弘則の明朝申し聞かさんと最と不興氣も寝所も入りたり

弘則の其翌朝常より早く起出でし人を走らせ本家の當主及び其家令何某と句部豊吉を招き寄せ一室の内額を集め午時近くなる頃まで何事かを語らふて俄かよおげんを呼入れて弘則の語を改め扱て先夜入佛供養のをり娘も附添ひありあがら色葉と密會するを知て許せしよもせよ事實知らざりしよもせよ孰れよしても其方等の不注意より容易ならざる椿事を惹起し次第に依ての家名よも拘はる大事よ付先祖へ對し無事よ差置き難きを以て離縁致す程よ左様心得よ但し京丸の乳母よても育つべければ此方へ引取るべし又是まで差したる落度もなかりしを以て差向き難儀さするも氣の毒あれば其方の爲めよ作りし衣類手道具の外よ金若干を與へ當分の内根岸の寮を貸し遣す程よ心静かよ身の方角を定むべし其筋へ離縁の届けをせし上の最はや

起縁はろい

起縁はろい

假親の名義も無用なれば豊吉との關係の今日までなり俄かよ一人となりての不自由とあらば心よ叶ひたる女共一兩人の召連れ参るも苦しからずと充分過ぎた手當なれど是まで工みし企ての成らん間際よ不慮の事より離縁となるを口惜しと自然と溢るる兩眼の涙ばかりを見る時の憐れと思ふ人もあるべし斯くて果てねば豊吉が慰めながら手道具や衣類の荷物を取纏め車よ積みて根岸へ送り女中の内よて腹心と豫て頼みしお清お松の二人を請ひ受け馴れし郎を夢の如くよて寐ても覺めても休まらぬ苦勞をかけし可憐の和子よ此まよ別るよ肉を殺がるよよ彌増して苦しとばかり泣伏すを情知らずと云へば云へ未練の盡きしと豊吉が和子を奪ふておげんを引立て車よ乗せて送遣るを見つし心を痛めたる海三來たれど本家の家令が一室よ伴ひ先夜入佛供養の節姫等を迎ひよ赴きて附添ひ居ながら姫の密會を知らざる段不注意の至たりありとの科條よ依て暇を差し遣はす部屋の荷



物の取り纏め置き落付き先の報知次第此の方より届け遣はすと云渡
されて途方よくれ何と返事も泣きたき思ひ我いおげんも引替へて少
しの手當もあらざるかどぐづくするを逐立て再び邸へ出入無用と
門前へ突出され路頭も迷ふ有様の自業自得と云ひながら亦憐れなる
次第なり是なん越出朝光の忠告も依て弘則も初めて兩人の好を覺り
憎しと思と事實を云い己の耻となるとゆゑ幸ひ先夜の不注意を辞
柄となして迷かよ斯く計ひしものあるべし

おげん一時悲しみしも手當の品の多きゆゑ當分事を欠くとなし若
しも我等の奸計と不義が露顯をせしならば命も危ふき事あるも些細
の科で離縁も遣ひし不幸が中の幸ひと窃かよ喜ぶ心の同じ海三が
寐所も迷ふて相談かたがた尋ねて來たる仔細を聞き斯うなるから
是非もあし貴ひし金を資本として二人世帯を固めなれば結局氣樂で面
白からんと語りあい更も心置くとなく酔ふて戯ふれ長き夜を更かし

起 縁 は ろ い

て眠むき翌朝の眼さへ開かぬ門の戸を叩き起して二名の巡查が御用
の筋と呼はりて何の容赦もあらばこそ海三おげんの前後を護り警察
署へと引立てたり

から出た鐘

越出朝光の辭を更め海三以前同様でおつた時どの違ふぞ此方の職權
を以て尋問するのじやいつまでも同じ様も知らぬとのみ申しても此
方よの確かな證據があつて聞くのじや有体も申してままへげんもそ
うじや偽りを申すと爲めならんぞ海三どうじや「どうじやと仰やッ
ても人を殺したの放火したのといふ覺えのありませんそんなら其事
の暫く尋ねまいが最一ツ尋問する事がある其方兩人密通の上げんの
實子を温尾の家督も立てやうといふ企てから主人弘則どのが娘若代
へ養子を致さんとするを妨げる方便を行者空善も頼んだであらう誰
が左様な事を云ひましたか一向も知らんと申すか「ハイ其報酬として

起 縁 は ろ い

起 縁 は ろ い

須彌壇を行行者も寄附した事まで存じてゐるぞ、須彌壇のげんが老母の菩提の爲めも寄附したのです夫ゆゑ温尾の奥方であるのも名前奥山源と彫付けてあります、それで世の中、欺けやうが警察署を欺とい出来んぞ、何も欺きのまませぬ、海三が四十七の案内で空善も面會して斯々云々と申して頼んだでないか、どうしてそんな事がイヤ誰か拙者も意恨でもある者が左様な虚言を申したのであります、まだ剛情を申すか、些ども剛情の申さん尋ねる方が剛情なのです、何と申す過言であらうぞ、と叱りつけて探偵を呼び何か耳語き探偵が出て行く、間もなく稚兒色葉が入り来りて朝光の側も坐し何か御用でござりますか、と明らか物と云ひし時海三おげんのギョツとばかりも驚き互ひ顔を見合せ眞蒼となりしを朝光の横目で眺めながら色葉も向ひ、先日海三が空善も面會して大師の託宣と偽り弘則どのも血統の男子を後嗣も立てよと云聞けくれと頼んだも相違あるまいな、左様でござり

起 縁 は ろ い

ます、然も其時當坐の報酬として三百餘圓の須彌壇を寄附し願望成就の上、金一萬圓を寄附する旨を認めた證書を差入れました、何と海三これでも剛情を張るか色葉の申すを虚言と申すなら四十七も召捕てあるも依て引合せようか又道場から其證書を取寄せようか、と問詰められ扱の色葉の啞もあらずして四十七も召捕られ身方と思ひし行者まで敵となりしかと俄か怖氣立ちて胴取ひをしながら、へい、へいと、うもへい、夫も相違ありませんと服せしも亦思ひ直して、へい、夫も相違ありませんが夫だけの事で只げんが自分の子を後嗣もしたい心から頼んだので別御法を犯したといふでもなし元來惣領娘の若代が出家を望んでゐるを無理も弘則が養子をしよとすゆる可愛そうもある所から方便を行行者も頼んだので實に温尾家の爲めを思ふてした事なるを斯様も調べられるのが合点が参りませぬ、此方の調べる目的、此事でないが其方達が偽りのみ申すゆる斯様な事までも悉く分

起 縁 は ろ い

ッておるよ依て最はや如何ほど陳じても無益であるといふ事を合点
 させる爲め一應尋問したのじや去る八月五日の夜奥山さきを殺害
 して放火したよ相違あるまいげん其方から海三へ其事を頼んであら
 う其夜出火の少し前よ人形町通りの道具屋の店前で立話したとも逐
 一承知しておるぞ」と云はれ海三おげんの再び驚き扱ひ又身方と思ひ
 し豊吉までが敵となりしか秘密の外よ知る者なければ知らぬとばかり
 剛情を張り徹し掛官を困まして罪を免れん心なりしよ斯なる上は
 最はやかなはじなまな加剛情を張りて掛官の憎しみを受けんより早
 く白状して憐愍を請ふよ若かずと覺悟を決めおげんと顔を見せて容
 を更め斯様よお調べが届きおるとい存せす虚言を申張りましたがお
 察しの通りげんと申し合せ奥山さきを殺り殺して放火致したよ相違
 ございませんと其夜の手續を逐一述べ了りて兩人とも只管憐愍の沙
 汰を請ひけるが重罪なれば容易ならずと直ちよ縛りあげて裁判所へ

起 縁 は ろ い

護送されたり

① 去喰たむくひ

行者を介し愚民を惑ひし奸悪を逞ましうして金錢を築め外よ信心を
 示して内よ逸樂を極め何でよ長く安かるべき榮華のありれ樂飯を炊
 々烟と消失せて身の縛しめの困しみも悪事の報ひ適面と流石の大胆
 未練もなく早く覺悟を決めたる奈良崎四十七が縛り就きたる次第を
 聞くよ色葉が病院よ入りしより女子たる事が顯はれてい行者よ云譯
 あるよもせよ世の取沙汰の次第よ依てい自然道場の寂れとなるの虞
 ありと氣遣ふより見舞と稱して屢々病院へ至りしよ最初兩三度の面
 會も許されしが其後の最のや快氣よ向ひたれば心配よ及ばずとて更
 よ面會を許されざりしかば愈々下審よ思ひ日々病院の受付又い小使
 の部屋よ行き金錢を贈りて様子を聞けバ只快よき方なれば遠から
 ず出院の運びよ至らんといふのみなりしよ尙ほ小使や宿直醫よ金錢

を贈り若しや異りし事ありしやと尋ねて不思議も色葉が少しづつ
 物といふやうななりしと云を開込みしが是まで全くの嘘なるも何
 であ満足な物といふとを得べきやと思ひおろしが其後の噂も最と明
 らかぬ物といひ得ると確かぬ聞きしかば其驚き一方ならず渠の常
 我等の所業を憎み怨むが如き色ありしを以て今満足な物といひ得
 必ず我等の秘密を申し立つべし斯ては最はや還るゝ途なし逃匿れ
 して逐ふ捕はれんより自首するも若かずと潔よくも覺悟を決めて女
 房よ委細を告げて貯への金銭等を渡し召使及び子分の者を呼集め
 仔細あつて旅行するも付一時暇を遣すとて夫々へ金子若干づゝを與
 へて速か引拂ひせ密か行者も面會して何事かを相談の上道場よ
 居合す講中の世話人を一時歸宅させ門を鎖して子戸のみを明けおき
 再び自宅へ戻りて衣服を更め女房と名残の酒杯を酌交して先刻より
 直傷の受付に在て様子を見ひかる京千吉を呼寄せ若干の金子を與へ

起 縁 は ろ い

て「様子」の外者から開たであらう迎も今度の逃げられぬと覺悟をし
 たから手前ども之れがお別れだ就ては是まで種々世話なつたが
 どうぞ千吉我の仕事なかく手前も探偵が出来めへ今度の様な
 不思議の事せへなきやア五年や十年の露顯するのじやアねへが天命
 だ是まで榮耀をしたのを儲けと思ふより外は仕方がねへ行者も自
 首を勤めておいたから入佛供養をしたばかりで此道場もお陀佛だ未
 練の様だが之れで一年ばかり叩いて見たかッたなアそれア親分どう
 した譯なんです之れぎりだの自首をするのど一休何事が起つたんで
 す手前まだ白化れるのか我を盲目だと思つてるのか手前が警察の探
 偵を頼まれて入込んである事ア疾くも知てらアエ、膽が潰れるだら
 う探偵と知りつゝ我が使つてゐるの、我の計畧だ新助も手前の中間
 だらう我が昔の氣性なら行掛の駄賃も手前等を撲き殺して夫から自
 首をするのだが悪僧ながら坊さんの側へ居て佛いじりをしたお陰よ

起 縁 は ろ い

起 縁 は ろ い

やアそんな無慈悲な事アしねへ夫よ今日の事ア手前達の探偵で露頭
 したのじやアねへから手前達も恨みのねへ只だ手前達の鼻がわいて
 氣の毒だどうせ我の罪の自首したつて夫で軽くなる罪じやアねへか
 ら手前我を縛ッて行て手柄よむねへサア早く縛んねへ「親分それやア
 いけません何ぼ手柄がしたいッて御恩よなツた親分を縛れますもの
 か」縛るとい出来ねへのよ何故我の悪事を探り出さうとしたんだ恩人
 の悪事を探偵して警察へ知らせる位なら恩人を縛ッたツて同なじ事
 だそうこうする内よ巡査が来るかも知れねへから早くしろ「そんなら
 御一所よ警察へ参りやせう」四十七が逃支度をするから引張て来たど
 いふのだせそうすると幾許か手前の手柄よならア好事の跡の悪いよ
 極ッてると初めッから覺悟をしてかッた仕事だ斯なる上の些とで
 も人よ功德を施した方が罪滅じだサア一所よ行かうと云へど千吉の
 其跡で行者の逃去る事もやあらんと氣遣ひ只うじ〜として進まざ

起 縁 は ろ い

るを四十七が無理よ引立てる折がらトヤ〜と巡査と探偵が三四名
 道場の子戸より込入る様子よ千吉の安心し四十七のソレ遣て来たか
 ら早く〜と千吉を促がし横手の木戸から立出る衆よも巡査が二名
 立佇みおりにて千吉と點頭さあひ見へ隠れよ四十七を護送せり



るんりのなもの

警察署よて猪之助を再應調べし處豫て若代よ懸想せしする嫁よ遣
 べしと若代の繼母おげんが受合ひし事ゆゑ最はや我物と思ひおりに
 よ色葉と密會中の様子を認め一時嫉妬の煽燃立て我を忘れ小柄を
 以て色葉よ傷を負はせしよて元より殺意あるよあらざると明白よな
 りしのみか其傷の爲め色葉の痲疾を全癒せしめし効もあり且つ色葉
 より哀願の筋もあれバ尋常の争闘と見做し些少の科料を課して放免
 となりしかば豊吉の喜び大方ならず引取の爲め警察署へ出頭せしよ
 其扣所よお常の來りおるを訝かり仔細を問ふと昨日までの秘して世

起 縁 は ろ い

間へ知らさずありしが既又行者及び四十七捕縛の手筈も行届さしゆ
 最はや公けよしても宜しとの事よて先刻承まはるる猪之助どのよ
 口中を刺れし爲め啞の色葉が物をいふ事を得るよ至り行者等の愚事
 透一露顯よ及びしよし殊よ不思議のそのみならず男と思ひし色葉
 の女子よて即ち妾の實子お若なる事の分りしゆ面會の爲め参りし
 なりと一伍一什を物語れば豊吉の勿論猪之助も驚き扱の怪我の効名
 よて現在從殊の癩疾を療せしか去ればこそ色葉が猪之助よ恨みなし
 罪を死してと掛官へ哀願せしなれ早う色葉よ面會したしと三人が語
 らふ所へ新助が旅支度のまゝ入り來りてお常よ向ひ神戸でお若の行
 衛を尋ねた所養家の父母の上海へ行たよて更よ様子が分らず落膽し
 て早く歸らんと思ひしが四十七の身元調べよ隙が入り漸々先刻戻り
 道場へ行て見ると四十七の既よ拘引よなり行者も最後の祈念が濟み
 次第拘引よなる筈よて巡査が詰めかけておらるるゆゑ様子を聞くと

起 縁 は ろ い

大變な事件驚いて只今越出様から承まゐると啞が物いふばかりでな
 く色葉の現在我子のよし知らぬとて眼の前よ居るものを神戸まで
 尋ねよ行た馬鹿くしさ神ならぬ身の是非なけれど斯して爰へ集合
 ふた四人の一家も同様よ不思議と繋がる縁類の癩疾の色葉が物いふ
 て温尾の家の奸物も越出様のお望み通りお家のお名を出たさずよ逐
 拂ひ愚民を惑ひす賣僧の秘密も皆顯のれた目出たさい互ひよ祝ふて
 よい事と喜び勇むも道理なり
 辨當時の隙を偷んで朝光が爰へ伴ふ色葉の姿の振袖ばかり元のまゝ
 髪は流行の英吉利結び薔薇の花さへ挿さみ愛嬌こぼるる鬢の毛よ顔
 の傷所も笑窪と見え括袴の露を拂ふて裾長く着なせし状の又一層可
 憐の態を増しよける斯くと見るよりお常と新助右と左よ進みよりお
 若父じやぞや母じやわい何よも云へぬと父母が咽ぶ四行の涙よの只
 一筋よ子を思ふ誠の心あらはれて側の見る目も共泣よ鼻打かみて豊

起 縁 は ろ い

吉が私わたくしのそもじが母の兄あにさすれば之これある猪いの之助のすけのそもじの爲ためめは從したが兄あになり是こゝまで馴染なじみの重かさねしが今いま更さらめて名な乗のりるあり先まづ夜の粗そ忽たに怒おこされよと前まへと後あとも兩人ふたりが詫わづるを手てよて押おし留とどめ右みぎなる母ははも取とり付けて懐なつかりしと泣なみ伏ふす背せまを左ひだりより輕かろく撫なでつゝ新あらた助すけが我わがの其その方かたが幼わかき時とき棄すてし退のきたる不ふ實じつもの再またび逢あふり面おもてぶせあがら前まへ非ひを悔くむて神かみ戸どまで尋たずねて行いつて今日けふ只ただ今いま戻もどつて名な乗のりるも父ちちと子こが盡つせぬ縁縁よよるものぞ我わがも顔かほを見みせよとて一人ひとりの娘むすめを父ちち母ははが左ひだり右みぎも争あふ不思議ふしぎの對面たいめん前後ぜんごも立た佇たむ豊とよ吉きち父子ふちこが我わがも物ものを云いはせよと四人よににんの縁縁言こと果はてなれば最もはや四よ十七じちを吟ぎん味みの時刻じこくと朝あ光ひかりが無な理りも色いろ葉はを伴ともふて糺ただ問と所ところへと出いで去いりぬ

ひやくく日の説法屈一つ

行者ぎやく空くう善ぜんと奈良崎ならさき四十七しじちを拘か引ひの爲ため根岸ねがしの道場みちばへ向むかひたる十じゆ數すう名なの巡めぐ査さと探たん偵ていの兩ふた人にんを取とり過りさぬ爲ため豫よけじめ手て配はいを定さだめ其その出い口ぐちへ

起 縁 は ろ い

張ちやう番ばんを置おき表ひら門かどある巡めぐ査さ二ふた名なと探たん偵てい三さん名なが内うちも立た入いり玄げん關くわんを窺うかがふも常つねも替かりて道場みちばも何なに人にんも居ゐらざるの不ふ審しんあり豫よけじめ委あ細さいを云い合あめ置おきたる千ち吉きちの何なにれへ行いきしぞよもや渠か等らを取とり過りし云い譯わけなきも身みを隠かくせしよのあらざるべし何なにもせよ油あぶ断たちと其その邊へんを見み廻めぐす折をりから奥おくの方かたより黒くろの洋やう服ふくを着き高たか帽ぼう子こを戴いたき左ひだりも大おほき赤あか草くさ袋ぶくろを提たげ右みぎも細こき杖つゑを携たづへたる年としの頃ころ五ご十じゆ前後ぜんごとも思おもひし氣き高たかき紳しん士しが徐しゆ々々と立た出いで手てを翳かきて巡めぐ査さ等らと禮らいを施ほしけれは巡めぐ査さ等らの不ふ審しんながらも禮らいを返かへし何なに人にんなるやと問とはんとするも先まち紳しん士しの其その所ところも立た止とりて各おの々々方かた御ご苦く勞らうでござるが最もはや夫おとこはと嚴げん重じゆうとするも及およびぬ兩人ふたりとも何なにれからか色いろ葉はが秘ひ密みつを白はく狀じやうしたるとを承うけ知ちして所しよ詮せん通たうれぬ所ところと覺かく悟ごを決きめ既すでも自じ首くびする所ところであつた四十七しじちの千ち吉きちが附つ添そふて先ま刻とき裏うら門かどから署しよへ參まつた筈はずじや空くう善ぜんの拙せつ者しやが同どう道だうする筈はずじやが是こゝまで惡あく事じを働はたらいたよもせよ出家しゆの身みなれば大だい師しの靈れい前ぜんも於おて最さい後ごの祈いの念ねんを致いたしたき

より暫時の猶豫をくれと強ての願ひ殊勝の事なれば拒む事も出来
 ず望みも任せたとて大喜びよて衣服を更め只今本堂の靈前よ於て
 祈念中である拙者此所よ於て祈念の終るを相待ちかりしが各々方が
 参られたれば拙者の四十七の申立てを傍聴致したき爲め一足先へ参
 る空善の手許よ在た書類等の此通り有合せの草袋へ櫻ひ込んで来た
 り依て最はや夫等の調べよ及べぬ依て祈念の了り次第鉦を打鳴す
 約束ゆる鉦の鳴るのを合圖よ空善を引立てられよいかい暇のかゝる
 事でのあるまいが成るたけ猶豫してやるが宜しい」と最と押柄よ指圖
 して悠々と立去りける跡を見送り巡査等の烟よ巻かれて不審顔君あ
 れの誰じやか知ておるか「我の知らん誰も知てゐるか」さうさういへ
 ば二課で見たような人じや「二課から出張してゐる人があるなら署長
 が何とか云ひさうなものでないか」さうさう」と評議區々の所へ門
 外よ見張りする巡査が驅來り「オイ今出て行た人の何じや」君も知らん

起 縁 は ろ い

か「是の變じや併し空善と四十七さへ通さよやえしじやあいか齋藤君
 本堂へ行て見て来い我の四十七の方を調べて来るから」といふを門外
 より來し巡査が聞て「一体どうしたのじや四十七の先き千吉と一所よ
 署へ行てしまふた空善の居らんのか」それじやアあの人の云ふた通り
 四十七の先へ行たのじや空善の本堂よ居るじやろう」と一同よ本堂へ
 赴き障子の隙より窺へば行者空善の美麗なる法衣を着飾り靈前よ光
 り輝やく燈明よ對し行座よ結跏して身動きもせず一心不乱よ黙誦祈
 念の眞最中間渡る風の飄々と行者の鬚を掃ふのみ常よの賑ひ喧すし
 き本堂も森々として物凄さまで静かなれば云合さねと巡査等の耳語
 く聲も開ゆべし静かよ扣へて祈念の了るを待つべしと障子の外よ障
 くまり今よも鉦を鳴らさんかと肩唾を呑んで空善の後姿を見つめ居
 たるが靈前の蠟燭風の爲めよ太く燃へ最はや盡きんとする程なるよ
 祈念の果てる様子よなきよ巡査等の氣を急ち今の遠慮もあし難く」と

起 縁 は ろ い

起 縁 は ろ い

うしやう餘まり長いでないか」さうさ切がない聞いて見やうか」もう濟
 じやろう我慢せい」と押問答をする所へ警察署より警部が驅付け來り
 「何をぐづぐづしてゐるのじや取逃しんせんかと署長が心配してじや
 「逃しんしません」が未だ祈念が濟みません」祈念とい何じや」先き二課か
 ら出張の方が最後の祈念だけ開届けてやつたよ依て其祈念の濟むま
 で待てやれと云ひれました」フム二課から誰が出張した」何といふ方じ
 やか知りませんが」そんな等のない制服を着て居たか」イ、エ黒のモ
 ニングコートでそれア變じや」大きな革袋を提げて署へ行きなせ
 んか」そんな奴が來るものか夫のゑも兎も角も早う空善を引立て行け」
 どの指圖は」巡査等も今の容赦のあらばこそツレと一度又込入るを見
 向もなさず自若として祈念中なる空善の左右より御用の筋わり警察
 署へ參れと呼べいれと更み答のあらざるのみかピクともなさる大
 膽は流石の巡査も氣後れして猶豫をするを警部は見かねて「何故の猶

起 縁 は ろ い

豫なるぞ早う引立てられよ」と勵まされて二人の巡査が空善の兩手を
 取らんとせしも岩の如くよて少しも動かすコレへと驚き引く力もゴ
 トリと音して空善が座したるまゝ仰向に倒れしはづみよスッポリ
 と脱けて轉がる白髪を警部の手早く取上げて「ヤ、是れは白髪の假髪
 じやム、驚も作り物じや釘で打付けてゐる」と云つゝ法衣を引剝れば
 是の如何は是なん先の日入佛供養を行ひたる結跏趺座せる大師の木
 像ありム、分つた先き出で行たといふ洋服の男が空善じや旨く誑か
 られた早う電信で捕縛方の手配をされよ拙者の署長は此次第を報告
 する後から誰でも車で此木像を持って來い」と警部の慌てふためきなが
 ら夫々の指圖して急ぎ警察署へ走せ歸る

どの空阿彌

警察署長越出朝光の道場へ出張せる警部が至急な面會を要する旨を
 云入れたるより奈良崎四十七の吟味を中止して暫時扣所へ退きしが

起 縁 は ろ い

再び出席して更々四十七に向ひ「先刻段々申開けた通り色葉の申立より悪事の一伍一什明白の上り別々申譯のあるまいな」如何にも仰の通りの次第恐入てござります」就て尋ねたいの油墨よて其方の背部より龜甲形を描き置き西新井と於て匂部豊吉と温尾弘則等を欺きたるの共方の發意か但し空善の指圖なるか「其儀の兩人相談の上よて致しました儀で誰の發意とも申されません」そんなら兩人同謀で致した事じやな」左様よござります」其節其方の指圖で人力車を挽逃げした新助よの委細の計略を打明けて頼んだのか「イ、エ其計畧の極々秘密よ致しました事ゆる只斯々してくれさへすれば何程の骨折賃をやると申して頼んだのでござります」されば新助の事情を知らずよ働いたのであるな」左様でござります」其節温尾の娘が拘られた時計を如何よして手よ入れしぞ」拘摸よ奪られたとの事でありますゆる之を探し出して何かの折よ大師の利益よ托け温尾へ還へしたあらば信心を増さして二

起 縁 は ろ い

廉の大禮那とするとが出来ようと存じ早速新助を頼んで御承知でもござりませう拘摸の親方で名の高い千住の千吉へ話しをして其時計を買ひ受けたのでござります」シテ其時計を戻す時温尾家へ忍び込んだのり其方一人か「先月の末よ痢病で死よました與太郎と申す子分と二人でござります」其前夜温尾の家扶淺城海三が道場へ参り其方と何やら密談を致したとの事じやが何を相談したのじや「へい色葉からか聞きなさいましたか」誰から聞てもよい事實左様な事があつたか「へい」「へいでい分らん密談を致したか」へい致しました」何の密談じや「へい」海三よ手引を頼んだのであらう」へいどうじや」左様でござります」其大金の如何致した「へい隣りの地所を買入れる爲めと大師堂の普請よ遣ひました」海三よ配分の致さなんだか」二百圓ばかり遣ひました」其事の皆な空善も知てあるか「へい万事相談の上で致しました」其方の是まで犯罪の廉で處分を受けたとないか「へい一度もござりません神戸に於

ての何を渡世も致しておつた「荒物を商ひながら車を挽ておりました
「空善とい何時頃から懇意よなつた」今年の春不圖した事から「黙れ其方
の神戸よ於て俗よヤシといふ香具師が渡世で田舎芝居などの肝煎を
して居たであらう一昨年海一といふ手品師を語らひ或る豪家へ立入
り金圓を欺き取た科で其方の重禁錮よ處せられたであらう其海一と
いふ手品師の何れへか姿を隠し今よ行衛が知れぬが大方此奴が空善
よ化けおつたのであらうどうじや有体よ申せ」ときめつけられて四十
七の大驚き扱の空善の化粧も顯はれしか斯く探偵の屈きし上は最
はや包むも詮さしと思ひけん更よ低頭平身して「恐れ入りました仰せ
の通りの次第海一と申しましたの全く空善でござります」フム彼奴
中々身形を變るよ巧みと見える一体何者である「生れに全く先般申上
げました通り京都府下北桑田郡中山よ相違ござりませぬが幼少より
芝居が好きで遂よ役者の弟子とあり田舎廻りを致してありました中

山假名藏と申す旅役者でござります」左様かされの化るとい上手であ
らうが長い間側よ居る色葉も覺られぬやうよ髯と假髪を着けて居
た辛抱よの感心した是で分つた一週間よ一度々らる秘密の祈念をす
ると云て一時間ばかりつゞ只一人部屋よ閉籠るとがありしと色葉が
申せしが此時髯を剃たり化粧の工合を直したのじやな「左様でござり
ます」シテ空善の白髪の假髪と髯の外よまだ何か變つた假髪などを所
持しておらざりしか役者の時分よ用ひました種々の假髪や附髯を所
持して居ります殊よ女形の能く似合ふ顔だちてござります」女の假髪
も所持してあるか「左様でござります」フムそれでの容易よの捕へると
の出来ん」と朝光が思はず吻く語の端よ四十七のそれと覺りて顔を振
擧げ「へエーそれでい空善の姿を變へて逃げましたか」と問はれてハッ
と心付きイ、ヤと一時の猶豫ひしが最はや吟味も盡きたれば假令空
善の逃げたるの此奴が知るも不都合あらじ殊よ何れへ逃去りしが方

起 縁 は ろ い

角さへも分らねば此奴を誘し尋ねんと更し面を和らげて「四十七段々の白狀神妙なるぞ殊に空善の如く逃隠れもせず自首致したる段合み置て其筋へ然るべく申立てるであらうなれど空善の逃去りたるに或り其方の指圖でいあるまいかとの嫌疑あり其邊の如何なるぞ」と致しまして私しの到底遣れられぬ所と覺悟のうへ行者も懇々自首を勸め置きました又依て既し當署へ參つておると存じ何事も包まず申述ました位で行者が逃げやうとい毛頭存せぬ事でござりました左様であらう逃るを指圖する程ならび其方も共し逃る筈じや其方の心底の能う分つておる其心底を見込んで尋ねるが空善の何れへ逃たであらう其方の大抵當りがつくであらうが官の便利となることじや有体よ申さぬと其方の不為あるぞ「へいそれア心當りのあるとなら此期よ及び包み隠しの致しませんか日本中を歩き廻つた男でござりまするか何所といふ當りのつきませんと申立てる折からツヤン／＼／＼と

起 縁 は ろ い

摩鳴らす出火を知らずする半鐘は驚き暫し猶豫の様子を窺ふ所へ一人の巡査が驅來り「署長火事です」近い様じやが何所じや「根岸の道場です」庫裏も本堂も物置も一度は燃上りました其火勢を以て考へますよ火薬の破裂したやうでございます多分空善が遁去る前よ夫々へ火薬を配り一時は發火するやうに仕掛けて置たものと認めます幸ひ風も静か四方は空地がありますから外へ延焼する氣遣ひのございませんが普請が新しい上は檜木造りゆゑ火の手中々強うございませんレあの通りと指さし示すを聞く朝光よりの四十七の驚き大方ならず是まで共し悪事の爲せしが斯くまで深き用意のあるの知らざりしと洞卷を昇る黒烟を硝子窓の内より遙か望んで呆然たり

○せん急げ

覺悟の上といふ云へ奈良崎四十七の行者空善の秘密と自分の悪事を逐一白狀及びければ詐偽所財と窃盜犯の廉を以て裁判所へ送られし

折から淺城海三奥山げんの兩人の豫審既も終結して放火殺人罪を以て重罪裁判所へ移されしが行者中山空善のみ警察よても彼の姿を變ずるとも妙を得たる旨を各地方の警察よても通知して探索甚だ嚴重なりしが如何なる姿よても如何なる所も隠れかるや未だ其行衛分らざりしも其幻術を見顯はされし上からの最はや世も出で再び悪事を働くとい出來ざるべし悪人斯くの如く夷ぎしに越出朝光の盡力も依るとい雖もまた京千吉と初野新助が其探偵を助けたる功も少なからぬバ朝光の其筋へ申立て右兩人を探偵吏も採用して其方向を定めさせれば兩人の喜び大方ならず尙其職務も勉勵せんとを誓ひたり且つ新助の色葉の實父なるを以て色葉を引渡されければ豫ての望み叶へりとい層も喜びたり夫是事の落着を聞き温尾弘則の更も奸婦も迷ひし前非を悔ひ行者も誑かられしを怨みしも朝光が忠義の盡力も依り家名を汚さず奸人を捕ひしのみか娘若代も嫌疑のかしらざりしを

起 縁 は ろ い

起 縁 は ろ い

喜びしが假令色葉の女なりしよもせよ若代が一旦渠も懸想せしより椿事の出來せる旨諸新聞も記載され幾分か其不身持の世も知られしからの最はや養子も迎へ難し兼て匂部豊吉の悴猪之助が娘も執心ありて嫉妬の爲め右の次第も及びしと云へば是幸ひ今更賣僧の申せし事を守るよあらねど豊吉の假も一旦げんの實家となりし縁故もあれバ其懇親を保たん爲め娘を猪之助も遣ひし京丸を家督も立ることよければ其旨を若代も告げたるよ若代の一途も男なりと思ひたる色葉が女ある由を傳へ聞き初めて前夜我が聞忍びし稚兒の其後おげんが申せし通り色葉もあらで猪之助が假も姿を似せたることを知り心よ蓋ぢたりしが是も結べる因縁と思へバ更も猪之助の慕ひしくなりし折からなれば父の語を快よく承諾せしゆゑ弘則の是までの盡力を謝する爲め一日酒宴を張て朝光を招き手厚く饗應せらるうへ朝光も若代の媒妁を頼みしかバ朝光も兼ての事情を知るものから大も其計



起 縁 は ろ い

ひを賞みし一時も早き方宜しからんと直ち豊吉を呼寄せ委細を告げし豊吉の悴猪之助と共に先日之粗暴を愧ぢ最はや此儀の叶ぬ事と失望してありし處なれば夢のあらざるかと思ふまで打喜び何分宜しく願ふとの事とされば表向の披露の來春延べ置き今宵假祝言を行ふべしとして俄か夫々の支度を整へ筆子が記念と遺したる名譽の時計を若代譲り爰めでたく三々九度の式を了り逗留と名けて若代を豊吉方へ引取らせしかば猪之助の久しく惱みし病も拭ふが如く一時癒え夫婦睦まじき有様と豊吉は初めて安堵の思ひをなせり

越出朝光が朽木倫齋の遺旨を継ぎ身命を抛つても主家の安然を計らんと思ひ込んだる誠忠空しからず宵と温尾の家のみならず多くの愚民を感はせし賣僧を始め悪人等を夷げめでたく局を結ぶに至りしかば弘則の大名其功を賞し我家の爲め京丸の爲め再び我家は立歸り牙

起 縁 は ろ い

事の注意を頼みたしと他事なく請はれて朝光の元來好んで警察へ奉職せし其身の榮耀を願ひしとあらず全く自ら其任に當り計畧を施し主家の奸物を掃はん爲めありければ其事落着せる上り取れや奉職の念もなく尙は後々まで主家の爲めを謀らん心底なれば速かき弘則の頼みを承諾し直ち警察を辭職して更ニ温尾の家令となりしかば弘則の根岸の別荘を朝光と與へ京丸と乳母を添へてお常へ其養育を頼み少なからぬ手當を給せしめて朝光夫婦は是れ皆倫齋翁の賜物ありとて一途忠誠を盡し且つ倫齋翁の位牌一個を匂部方へ贈りしかば豊吉も間違えて二基となりし位牌の不要とならざりし不思議を喜び更ニ姓を朽木と復し互ひ親しく往來せり

すこころ物を上手あれ

爰また奈良崎四十七の豫審に於て夫々吟味のする其所有なる根岸の道場空善の所業にて残らず焼失せし地所は今尚ほ四十七所有

起 縁 は ろ い

の名義なれど其根元を糺せば豊吉より空善も寄附せしなるが其節戸籍上空善よての都合わると爲め假りも四十七の名義も替へおきたるものなれば空善失踪せし上の速かよ之を豊吉も還付すべきものとて其筋の説諭もあり四十七も前非後悔の折なれば何卒豊吉へ還付致したし且つ四十七が更も買入れたる隣りの地所の此度焼失せる建物の代りも無代償よて豊吉へ譲り渡したしと申し立てしよて右の地所の圖らず豊吉の手も戻りけり

色葉の不慮の椿事より満足の人となり實父新助方へ歸るとを得たれど賣僧も周を汚されしのみならず悪人といふ云へ多くの人の秘密を訴へ罪も陥せしとの快よからず且つ是まで久しく佛も仕へし身なれば罪障消滅の爲め尼となり終身佛も仕えたしと請ふてやまねば新助のお常等も相談のうへ餘儀なく其意も任せしかば色葉も朝光も頼み道場焼失の前も警察署へ引上げられたる大師の木像下附の儀を其筋へ

起 縁 は ろ い

請願して許可を得よければ是ぞ空善の記念なり長くお側も仕ゆべし釘付よせる作爲の共儘よて面相の空善も背たるも深き因縁もよるものならん何れの地もか庵室を営み此靈像を安置せんと企つる旨を聞傳へたる豊吉も其心操の殊勝なるを賞し先の道場も由緒もあればとて此ほど其筋より還付されたる根岸の地所の半を割きて色葉が庵室も寄附せしを弘則はじめ朝光其他千吉等が聞知り其分も應じて庵室建立の資金を喜捨せしよて色葉も意外の淨財を得て思ひしよりも立派な庵室を営み大師の靈像を安置して朝夕供養を修し行ひすまして日を送るうち彼の椿事より一旦離散せる講中の世話人等も追々も回復して参詣する者あるのみならず鬻のある大師の世も珍らし鬻大師の靈像も著るし現在啞が物いふに至りしと云傳へ更も信者を増しければ寄附の物品よて色葉も念佛三昧も此世を安く送るとどのなれり是ぞ即ち鬻大師の縁起よこそ

起 縁 は ろ い

扱此小説も是よて結局と相成たり初め此趣向を立るゝ當り或る友人が所詮首尾よく纏まるまじと云ひよき然れど余の幼少より小説を好み他人の作を彼是評せし事もあれはなとて書けざるとのあるべきと先づ略筋を立てし筆を下せしが何を申すも初めから四十七の題を定めてかゝりし事ゆゑ種々の差支を生じ思ふまゝに綴れぬ廉も多く中より随分附會の條なきはあらねど手習初めの假名作者の手際よしては自分ながらもどうやらかうやら四十七回の伊呂波短歌を能くも是まで纏めたりと思ひぬ只忙がしき身の夜延仕事の手暗がり消書も奇損の多くしてお読みつゝさのわるき所もありしならんが是なん弘法も筆の誤りと御見ゆるしの方へ此題號よより好きこそ物の上手と御賞賛あらんとを希がふ

いろは縁起終

明治廿四年十月十五日印刷
 明治廿四年十月廿六日出版

著 作 者

芳 川 俊 雄

淺草區東三筋町五十番地

發 行 者

鈴 木 金 輔

京橋區本材木町三丁目廿六番地

印 刷 者

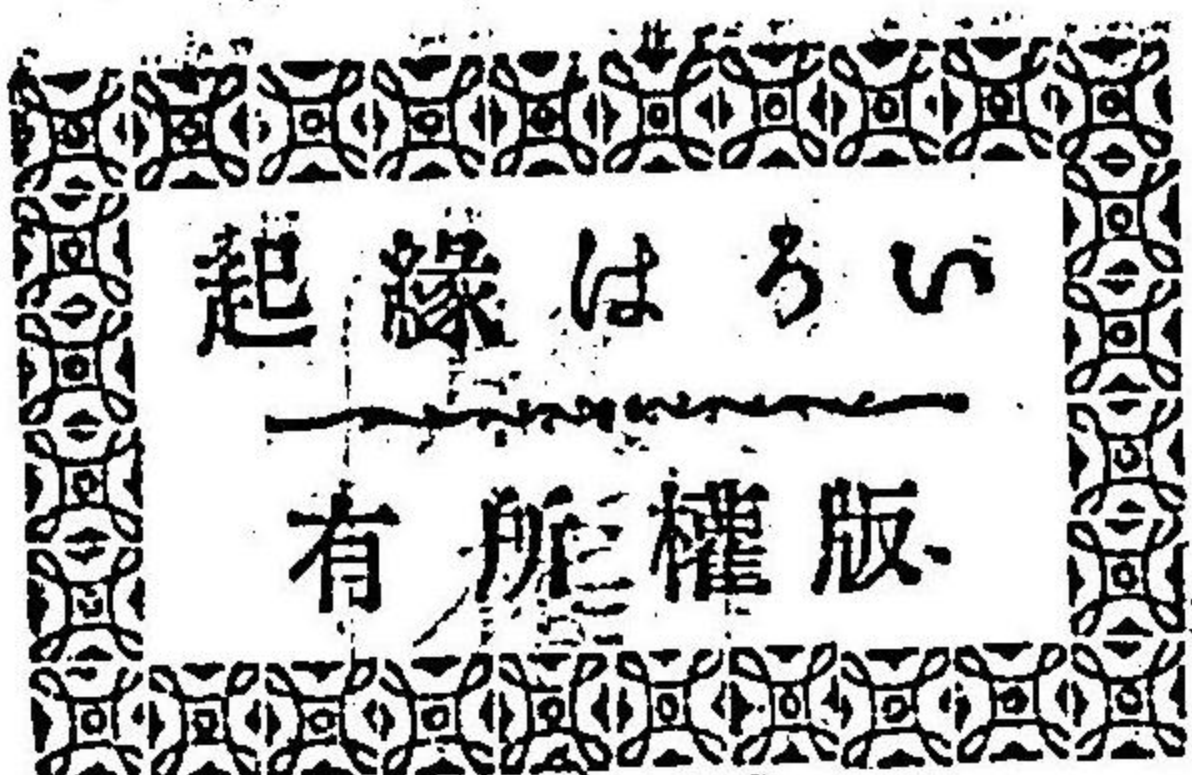
瀧 川 三 代 太 郎

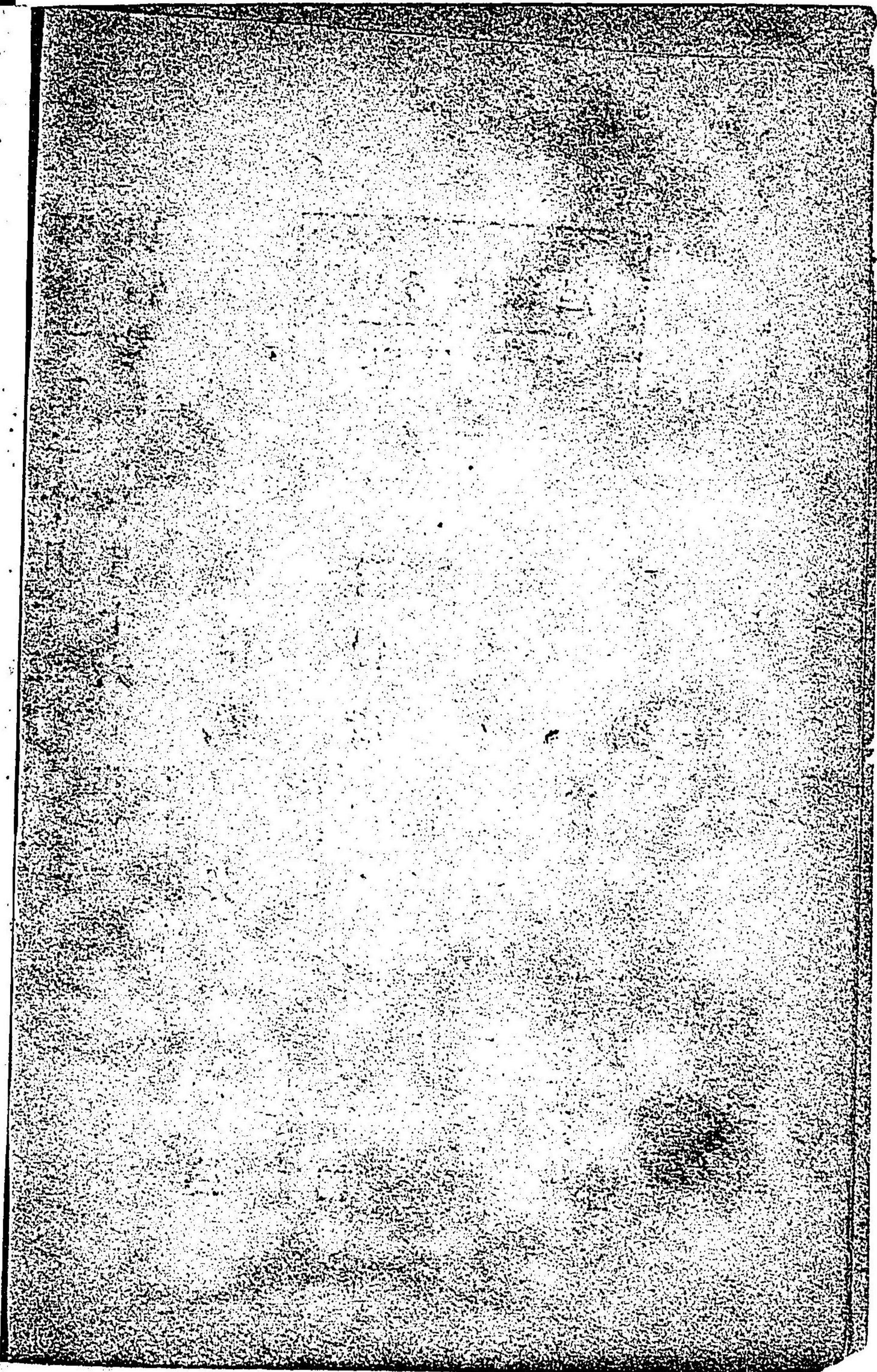
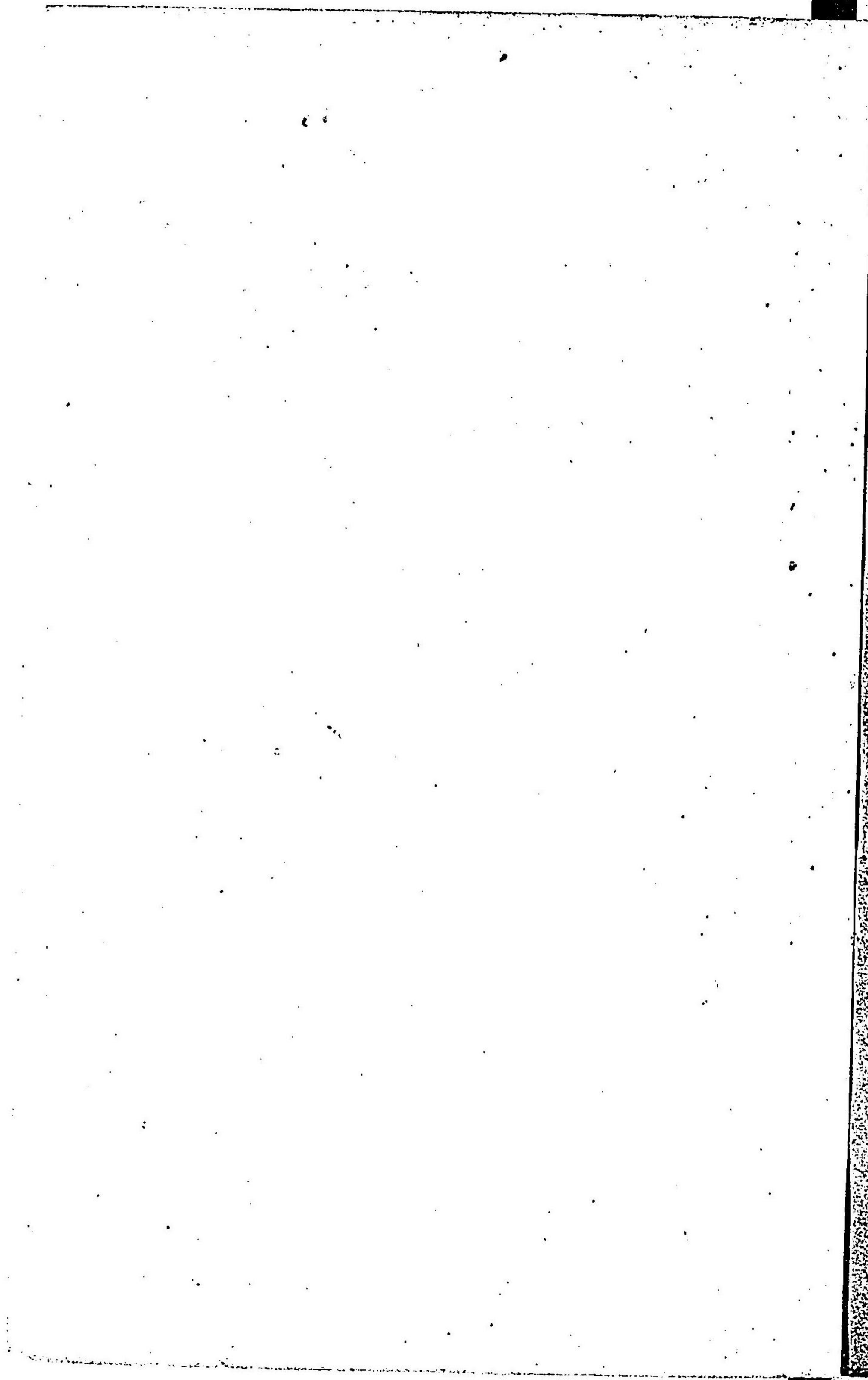
日本橋區新御泉町一番地

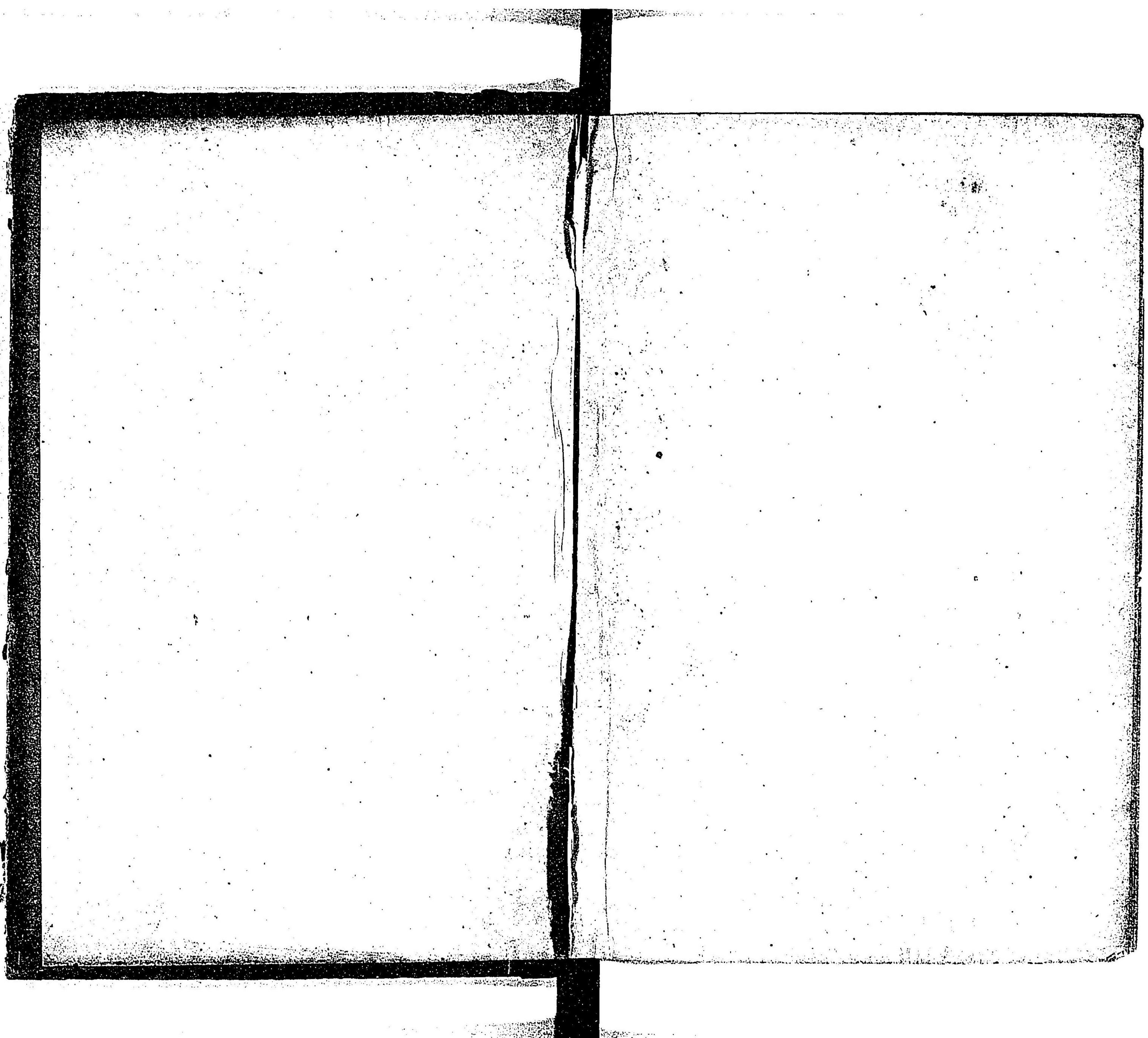
發 兌

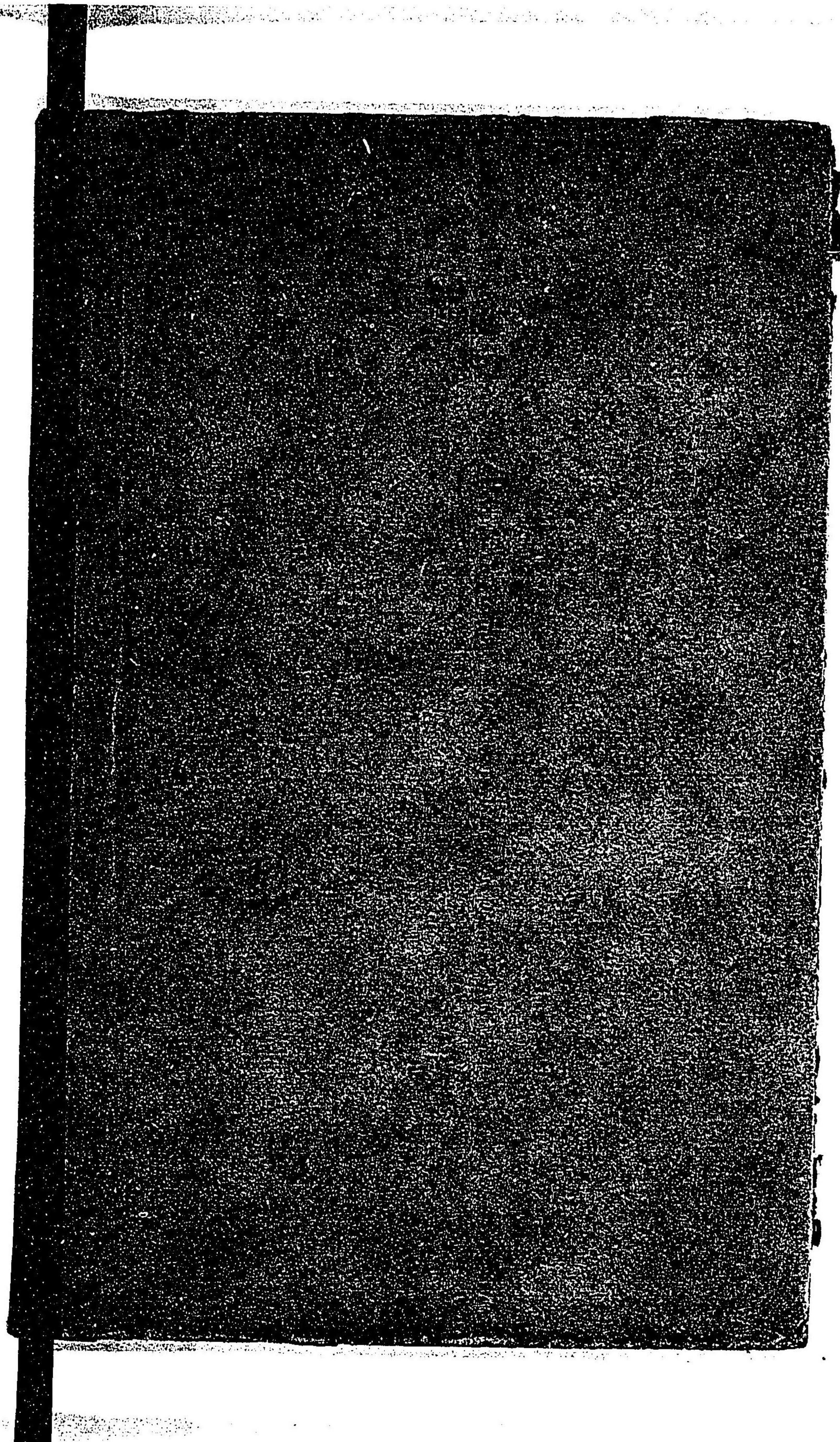
三 友 會

京橋區本材木町三丁目廿六番地











092910-000-6

特11-493

いろは縁起

芳川 春涛/著

M24

DBQ-0223

